



Global Wings

of Fukuoka Youth 2015

INDEX

page	
2	知事あいさつ
3	団長あいさつ
4	事業概要
5	事務局・団員名簿
6	第1次研修
7	第2次研修(フィールドワーク)
10	第3次研修
11	副知事表敬
12	第4次研修(海外研修)
29	第5次研修
30	第6次研修(地域実践活動)
33	団員レポート
46	事務局から一言
47	Snapshots with Message
55	募集要項

国際的な視野を持ち、 地域で活躍する青年リーダーの育成を目指して



福岡県知事

小川 洋

急速に進むグローバル化や地方創生の機運の高まりなど、われわれの社会は大きく変化しています。

このような中、次代を担う若者には、広く世界に目を向け、チャレンジ精神旺盛な高い志を持って社会の発展に貢献することが期待されています。

一方で、海外への留学を希望する若者の数が減少するなど、わが国の未来を担う若者たちの“内向き志向”が懸念されているところです。

これからの地域の発展を考えると、異文化を受け入れ、海外の人々とも積極的に交流できる、広い視野を持った若者の育成が極めて重要です。

躍動するアジアの現状を肌で感じてもらい、国際的な視野を持った青年リーダーを育成するため実施している「福岡県青年の翼(グローバル・ウイング)」事業は今年で18回目を迎え、これまでに836人の若者たちが参加しています。

今回は23人の若者たちが、ミャンマーのバガンとパコック、ヤンゴン、そしてタイのバンコクを訪問し、現地の青年たちや海外進出している県内企業の皆さん、社会貢献活動に取り組む国際NGOの皆さんと意見交換するとともに、「人材育成・教育」「まちづくり」「産業政策」など自分たちで設定したテーマでの自主研究活動に取り組みました。

また、海外研修の前後には、福岡県の国際戦略や環境貢献、県内企業による国際貢献、県内NPOによるソーシャルビジネスなどについても学んでいただいたほか、団員の自主企画による地域実践活動にも取り組んでいただきました。

参加された団員の皆さんが、この「福岡県青年の翼」で学び、体験したことを糧に、地域における青年リーダーとして活躍いただくことを、心から期待しています。

県では、昨年10月に策定した「ふくおか未来人材育成ビジョン」に基づき、「Think globally, act locally」国際的な視野を持ち、地域で活躍する「人材」の育成に取り組んでまいりますので、皆さまのご理解、ご協力をお願いします。

最後に、本事業の実施に当たり、ご尽力いただいた福岡県青年の翼実行委員会をはじめとする関係者の皆さまに心から感謝申し上げます。

研修中を通して成長していく、 皆さんの今後の活躍を期待して



団長 新社会推進部次長

重松 典子

グローバル・ウイング2015は、9月上旬の第1次研修から始まり、それぞれが自主的なテーマを持って挑んだ第2次研修、渡航直前の第3次研修を経て、11月8日から15日までの7泊8日の日程で、ミャンマーとタイの2カ国を訪問しました。

今回、団として初めて訪問したミャンマーは、アジア最後のフロンティアと呼ばれる世界的にも注目を集めている国です。民主化後初の総選挙という歴史的な日と渡航日が重なったことから、不測の事態を避けるため、中心都市ヤンゴンから北へ約580キロ、福岡とも縁の深いオイスカ研修センターを訪問しました。ヤンゴンから飛行機で1時間半、そこからバスで2時間ほど揺られて到着したパコック県エサジョ郡にある研修センターでは、痩せた大地が日本の技術協力によって緑豊かな農地に変わりつつある現実を体感することができました。

そこでミャンマー国内から集まり、共同生活を送りながら、祖国の未来のために農業技術を学ぶ青年達との交流を通じて、皆さんそれぞれが心に期するものがあったのではないのでしょうか。

タイのバンコク都では、視察先の選定や調整を事務局とともに団員自らが行き、自由闊達な雰囲気の中で最先端の教育を受ける小学校の授業を視察したり、国家レベルの都市計画に携わる企業からバンコク都の交通整備計画についてレクチャーを受けたり、福岡や日本の農産物を取り扱う若き経営者と意見交換を行うなど、非常に充実した分野別別自主研修を実施することができました。それぞれの訪問先では、各自が積極的に発言を行うなど、研修中、日々成長していく皆さんの姿に頼もしさを覚えました。

今回の研修では、これからの発展が期待されるミャンマーと発展著しいタイという対照的な2カ国を訪問し、多くのことを学び、深く考えたことと思います。

最後に、半年に及ぶ長期の、時にはつらい研修をともにのりこえて培った仲間との友情は、皆さんの人生にとってかけがえのない財産になることと思います。パコックのオイスカ研修センターで出会った青年達の熱いエネルギーを心にとどめ、これからも切磋琢磨して欲しいと思います。そして近い将来、国際的な視野を身に付けた青年リーダーとして、皆さんがそれぞれの立場で活躍されることを心より期待しています。

第18回福岡県青年の翼(グローバル・ウイング2015) 事業概要

1 趣旨・目的

県内青年を、飛躍的に発展し続けるアジア諸国へ派遣し、躍動するアジアの現状を体感させることで、国際的な視野を備え、企業・団体等の中核となって活躍する青年リーダーを育成する。

2 概要

- (1) 訪問先 ミャンマー (パコック・バガン・ヤンゴン)・タイ (バンコク) (2ヶ国4都市)
 (2) 実施時期 平成27年11月8日(日)～15日(日) 7泊8日
 (3) 人員 25名
 ・団長、事務局員
 ・団員 23名
 (4) 参加資格 平成27年4月1日現在で、満18歳以上30歳以下の県内居住者
 *企業・大学・青少年団体・NPO団体・自治体等で、地域活性化や社会貢献活動、国際交流等を研究・実践している者、または今後このような分野に取り組もうと考えている者
 *第1次研修から報告会まで全ての研修プログラムに参加できる者
 *ただし、過去2年間(平成25年度以降)のうちに国・地方公共団体等の公的経費(一部助成を含む)によって海外派遣事業に参加した経験のある者、国又は地方公共団体の議会の議員の職にある者は除く。
 (5) 実施主体 実行委員会(県、青少年団体連絡協議会、(公社)青少年育成県民会議、福岡県青年の会、(公財)福岡県国際交流センターほか)
 (6) 団編制
- | | | | |
|------------|-----------|-----------|----|
| 団長
事務局員 | リーダー (1人) | メンバー (7人) | 1班 |
| | リーダー (1人) | メンバー (7人) | 2班 |
| | リーダー (1人) | メンバー (6人) | 3班 |
- (7) 研修内容

① 第1次研修 9月5日(土)～6日(日)

目的
 団員が、事業目的・内容について十分理解し、事業に臨むにあたって必要な心構え・態度を身につける。また、海外派遣研修の成果を高めるため、基礎知識を学び、課題を認識することを中心とする。

内容
 ア 事業の趣旨・目的的理解
 イ 訪問国・訪問先についての基本的知識の習得、課題の整理
 ウ 海外渡航オリエンテーション

② 第2次研修(フィールドワーク) 9月7日(月)～10月16日(金)のうち任意の日

目的
 団員が、海外研修内容・訪問先に関連する事項について、実際に県内の企業や団体・施設等を訪問し、現状や課題を学ぶことで、海外研修をより効果的なものにする。

内容
 ア 海外訪問先に関連する県内の企業や団体・施設等への視察訪問・調査

③ 第3次研修 10月17日(土)～18日(日)

目的
 訪問国についての知識、言語、生活、文化等について学ぶとともに、訪問先についての理解を深める。また、海外研修を直前に控え、改めて事業の趣旨・目的を再認識し、団員相互の結束を深めるとともに、海外研修に向けた最終準備を行う。

内容
 ア 訪問国、訪問先に関する調査研究
 イ 海外青年等との意見交換会のテーマ、交流会の企画
 ウ 海外研修最終調整
 エ 結団式

④ 第4次研修(海外派遣研修) 11月8日(日)～15日(日)

目的
 躍動するアジアの現状を体感し、国際的視野を広げるとともに、内向き志向を打破する。

内容
 ア 急成長を遂げている企業、先進的で大規模なインフラ、歴史的・文化的な施設や社会貢献活動等を視察調査する。
 イ 現地青年や現地で活躍する日本人との意見交換、交流会により国際的視野を拡げ、真の国際理解を育む。

⑤ 第5次研修 12月5日(土)～6日(日)

目的
 海外派遣研修の成果を集約し、それらで得た貴重な経験を、今後どのように地域社会へ還元するかを企画・立案する。

内容
 ア 海外派遣研修結果の取りまとめ、発表、意見交換
 イ 報告書原稿のとりまとめ、整理
 ウ これまでの研修成果に基づく地域別実践活動の企画・立案

⑥ 第6次研修(地域別実践活動) 12月7日(月)～1月31日(日)のうち任意の日

目的
 団員間のネットワークを強化するとともに、団員の企画による自主的な地域活動・国際交流活動等の実践に取り組む。

内容
 県内各地域に分かれて、さまざまな地域活動・国際交流活動等を実践する。

⑦ 研修成果報告会 3月21日(月)予定

目的
 研修成果や福岡の若者の優れた活動を、広く県民一般にアピールするとともに、アジアと共に発展する福岡のあり方等について考える。

事務局・団員名簿

氏名	所属及び職名	役職
重松 典子	福岡県新社会推進部 次長	団長
渡辺 伸也	福岡県新社会推進部 青少年課 事務主査	副団長

氏名	所属	生活班(役職)	分野別
今村 小雪	西南学院大学 経済学部 2年	1班	リーダー まちづくり
大原未流斗	株式会社福岡銀行		サブリーダー 産業政策
鯉川 聡	福岡商工会議所		企画係 まちづくり
溜島 萌	福岡教育大学 教育学部 4年		企画係 人材育成・教育
早戸 純一	添田町役場 教育委員会		企画係 人材育成・教育
原田祥太郎	久留米大学 文学部 1年		記録・資料・写真 産業政策
箕原あおい	福岡県立大学 人間社会学部 2年		記録・資料・写真 まちづくり
渡辺 将太	学校法人中村学園事業部		記録・資料・写真 産業政策
市木 優貴	みやこ町役場 教育委員会	2班	記録・資料・写真 まちづくり
井上 侑希	福岡女学院大学 国際キャリア学部 1年		企画係 産業政策
大野 香織	北九州市立大学 法学部 1年		リーダー 産業政策
勝谷 崇寛	九鉄工業株式会社		記録・資料・写真 産業政策
古賀あゆみ	福岡市役所		企画係 人材育成・教育
能塚 靖裕	株式会社西日本シティ銀行		サブリーダー 産業政策
福岡 静	学校法人福岡女学院		記録・資料・写真 人材育成・教育
横尾 春菜	九州大学法学部 2年		企画係 まちづくり
東 宏輔	西日本鉄道株式会社	3班	リーダー まちづくり
安部日向子	九州大学 農学部 3年		サブリーダー 産業政策
系数 基樹	北九州市立大学 外国語学部 1年		企画係 人材育成・教育
緒方 亮介	九鉄工業株式会社		記録・資料・写真 まちづくり
甲斐紗由美	福岡市水道局		企画係 まちづくり
富久 萌	中村学園大学 教育学部 3年		記録・資料・写真 人材育成・教育
三角 拓也	福岡県信用保証協会		記録・資料・写真 人材育成・教育

第1次研修

於：福岡県立社会教育総合センター
2015年9月5日(土)～6日(日)

素晴らしい講師の方々から、訪問国の基礎知識やアジアと日本の絆、企業のグローバル戦略などを学び、刺激的な研修となった。

グローバルウィング2015の第一次研修が始まった。これが団員同士の初めての顔合わせとなるため、それぞれが緊張した面持ちで資料に目を通しながら、始まりを待っていた。

初日の午前中は、日本貿易振興機構(JETRO)海外調査部アジア大洋州課長代理 水谷俊博様より、訪問予定国である「ミャンマーの概要」、そして中村学園大学教授 占部賢志様より、「アジア太平洋と日本の絆」についての講義を頂いた。現地でも生活したことのある水谷様から、写真を交えながら現地の様子を話していただき、漠然としていたミャンマーのイメージがだんだんとはっきりとしてきた。占部教授の講義では、国際交流するためには第一に日本のこと、郷土のことを知ることが重要だと教えて頂いたことが心に響いた。

午後の最初の講義では、福岡県の様々な施策について学んだ。初めて知ることばかりで、自らの勉強不足を痛感するとともにアジア各国と交流を図りながら、共に発展を遂げている福岡の現状を知り、とても興味深く感じた。次の講義では、田中藍株式会社取締役常務の田中克明様より、「グローバル戦略と人材育成」について学んだ。アジア各国をはじめ、様々な国に海外進出する福岡県の企業の勢いを知り、

身が引き締まる思いだった。その後、生活班に分かれ各班における役割分担を決めた。自己紹介から始まり、だんだん打ち解けてきて、少し経つと研修室は明るい声であふれていた。

1日目の夜には、県職員の方々を含め団員全員での懇親会が行われた。1人ひとりが自己紹介をし、終始笑顔に包まれた素敵な時間であった。

2日目の午前中は新日本製薬株式会社開発事業室室長の長根寿陽様より、該社が行っている「ミャンマーでの社会貢献」に関する講義を聞いた。現地での薬用植物栽培事業や農業セミナーを開催するなど様々な取り組みが行われており、福岡、そして日本とミャンマーのつながりを知ることができた。

午後からは分野別の班に分かれ、第二次研修の分野別訪問先の検討とタイでの訪問先の検討を行った。第二次研修の企画書を班員で作りに上げていく中で、研修のテーマや目的を話し合うなどとても濃い時間を過ごすことができた。

こうして、2日間にわたる第一次研修が終了した。最初は緊張していた団員達も、研修が終わるころには団結力も高まり、研修室は活気にあふれていた。海外研修への楽しみが大きく膨らむ研修であった。(1班 簗原あおい・溜島萌)

講義名	講師
「ミャンマーの概要について」	水谷 俊博 JETRO元ヤンゴン事務所次長
「アジア太平洋と日本の絆」	占部 賢志 中村学園大学 教授
「福岡県の国際交流と施策について」 「海外事務所を中心とした施策について」 「福岡県における国際環境協力」	深川 光一 福岡県国際交流局 交流第二課 山田 修平 福岡県商工政策課 企画・国際班 苗井 章紀 福岡県環境政策課 企画主幹
「グローバル戦略と人材育成について」	田中 克明 田中藍株 常務
「ミャンマーでの社会貢献について」	長根 寿陽 新日本製薬株 開発事業室室長



JETRO水谷様からミャンマーについてレクチャー



熱く語りかける占部教授



社会貢献活動について語る長根様



研修風景

第2次研修 フィールドワーク

北九州子どもの村小学校
訪問日時：2015年9月28日

人材育成・教育班

日本教育の「常識」を問い直そうとして生まれた「北九州子どもの村小学校」を訪問した。

人材育成・教育班では、日本の学校教育の問題点として、子どもの自尊心の欠如、外向き思考の少なさ、英語力の低さなどがあげられた。そこで、今後の日本の教育のあり方を考えることをテーマにし、子どもの内面的な力を育成することに重点を置いている、「北九州子どもの村小学校」を訪問した。日本の学校教育について、この学校から学ぶことは非常に多いと感じた。

概要

北九州子どもの村小学校は、宿題もテストもない体験学習を中心とした教育方針で、感情面、知性、人間関係の面で「自由な子ども」を育成することを目標としている。現在の日本教育の「常識」を問い直そうとして生まれた学校である。「平尾台ファーム」「ものづくり工房」「劇団ひらおだい」にわかれたプロジェクト、コーラスやあみもの、九州の料理など様々な種類から学習できる自由選択(チョイス)など、独自のカリキュラムで実用的な体験ができる。

見学内容

学校についての説明を受けた後、授業の様子や校内を自由に見学。ランチは学校で作る給食をいただき、子どもや大人たち(先生)と交流。午後は授業と校内全体ミーティングを見学。

感想

プロジェクトの時間、劇団ひらおだいの子もたちは、校内の好きな場所で、自主的に劇の練習をしていた。驚いたのは、大人の目が届かない場所でも怠ける様子もなく、子どもたち同士でアドバイスし合いながら自主的に活動していたことである。午後に見学した全体ミーティングでは、子どもたちが積極的に手を挙げ、自信を持って自分の意見を述べていた。議長を務めていた生徒も、いろんな意見を上手に取りまとめていて、スムーズに話し合いが進んでいた。その様子から、子どもたちの自尊心や個性が養われていることが伺えた。子どもたちが学校で学ぶことを楽しんでいる様子を見ると、日本の学校教育について、北九州子どもの村小学校から学ぶことは非常に多いと感じた。

(報告者：糸数基樹)



自然豊かな場所にある北九州子どもの村小学校



授業風景～チョイス(編み物)の授業～



授業風景～プロジェクト(ファーム)



授業風景～プロジェクト(ものづくり)

第2次研修 フィールドワーク **福岡市役所** 訪問日：2015年9月28日 **まちづくり班**

天神の街全体での新たな空間と雇用を創出する取り組み「天神ビックバン」についてヒアリング。

まちづくり班では、「天神ビックバン」というアジアの拠点都市として、天神の街全体での新たな空間と雇用を創出する取り組みについてお話を伺った。天神ビックバンの取り組みには、①天神明治通り地区の利用方針決定 ②天神1丁目南ブロックまちづくり ③旧大名小学校跡地まちづくり ④天神地下街仮説車路の有効活用 ⑤スタートアップカフェの運営及び機能強化 ⑥水上公園再整備 ⑦天神通線の延伸 ⑧地下鉄七隈線延伸 がある。その中で私たちは特に、交通渋滞緩和のための都市循環BRT、天神明治通り地区計画、スタートアップカフェについてヒアリングを行った。

都市循環BRT（バス高速輸送システム）

天神ビックバンにより新たなビジネスやショッピングをはじめとする交流や活動が高まることで交通渋滞が発生すると考えられる。そこで渋滞緩和のためにマイカーではなく公共交通ネットワークで効率よく繋ぐために導入されるのがBRTである。導入されるBRTの特徴は、接続バスで天神、博多、マリンメッセなどがあるウォーターフロントの都心3拠点を繋ぐ。BRTは実際に他県でも導入されたことがあり、岐阜県では接続バスに乗りたくないという観光客が増えたという話を聞き、実用性があると共に福岡市ではどれほどの交通渋滞緩和に繋がるのかはまだ未知数であるとのことだった。

天神明治通り地区計画

天神明治通り地区は建物の老朽化が進んでおり、天神ビックバンの取り組みでは建物の建て替えと同時に容積率の緩和と高さ制限の特例承認により今まで以上に多くの企業や店の増加が可能になる。また今回は地区全体でまちづくりが計画されているため、まち全体のまとまりもあるそうだ。まちの将来像は「アジアで最も創造的なビジネス街」で、複合性・回遊性・沿道性・持続可能性という4つの目標に向かって今後もまちづくりが進められる。



明治通り地区_航空法高さ制限の緩和エリア

スタートアップカフェ

スタートアップカフェは、起業をしたいと考えているひとへの①情報提供・相談・交流機能 ②ワンストップ開業窓口機能 ③人材確保支援機能を行う拠点で、今泉のTSUTAYAの3階に位置していることもあり、誰でも入りやすい空間を生み出している。スタートアップカフェ内にはコンシェルジュという企業全体のサポートをしてくれる人が駐在しており、様々なことを相談することが可能である。また起業に関するイベントなども行われており利用者は増加しているとのことだった。利用者年齢層は30代が最も多く、女性の利用も全体の2割を占めている。

今回のまちづくりのフィールドワークで、安全で便利だと言われている福岡の都市にも多くの課題や改善点があることを実感することができた。天神ビックバンの取り組みが、福岡市の更なる発展に繋がりますように魅力のある都市になっていく姿を見るのがとても楽しみである。
(報告者：今村小雪)



スタートアップカフェにおけるセミナー

第2次研修 フィールドワーク **株式会社力の源カンパニー** 訪問日：2015年10月7日 **産業政策班**
福岡農産物通商株式会社 訪問日：2015年10月13日

グローバル化が今後さらに加速することが予想される中、海外展開に力を入れている福岡県内企業を訪問。

産業政策班は10月7日に株式会社力の源カンパニー（一風堂）、10月13日に福岡農産物通商株式会社を訪問した。TPPの輸入品目の関税撤廃合意がなされるなど、国際情勢が刻一刻と変化し、グローバル化が更に加速することが予想される中、海外展開に力を入れている企業を訪問した。

株式会社力の源カンパニー（一風堂）

福岡県発祥のラーメン専門店一風堂は、海外進出を積極的に進め、国内外に多数の店舗を持っている県内を代表する企業の一つである。私たちは、一風堂を訪問させて頂き、海外へ進出している福岡県の企業の実態を学ぶとともに、福岡県が今度さらに発展するためにはどうすればよいのか？を知るヒントを得ようと考えた。

ご対応頂いた経営戦略本部の野原慎輔様によれば、「海外へ出店する際に最も大事にしていることは現地の情報収集です。たとえばインフラの整備ができていますか？所得水準が高いか？さらには実際に現地に社員を派遣して、自分たちの目で正確な情報を収集するように努めています」とのこと。さらに、「海外進出の際に一番問題になるのは、文化・宗教の違いによる食材選定です。日本の国内と同様のサービスを提供しては現地で受け入れてもらえないので、現地の方の好みに合う味付けや調理方法を常に考えています。そしてその国特有の国民性による従業員の働き方にも気を付けています。」と教えて頂いた。

同業他社に先駆けて海外進出を果たし、さらに事業の拡大を続ける一風堂。野原様が思う福岡県が抱える課題は、「来日する海外からのお客様を県内の様々な場所で受け入れるための交通網が充実していないこと、県内を安心して周遊してもらうためには、各国言語が対応できるスタッフが必要だが、それが不足していること」とのことだった。



ご対応頂いた野原慎輔様

福岡農産物通商株式会社

福岡農産物通商株式会社は、福岡県の農産物の販売チャンネルの多様化を図り、更なる輸出拡大を図るために、2008年に福岡県や県内のJAグループ、九州の主要企業などが出資して設立した貿易会社である。農産物や加工食品、その他の食品を海外へ輸出しており、更には貿易コンサルティング、海外市場マーケティングを行っている。

ご多忙中にも関わらずご対応頂いた、波多江淳治代表取締役によれば、「海外と取引をする上で大事にしていることが三つあります。一つは、輸出先の国民性を分析して、取引するに適した条件が整っているか時間をかけて調査を行うこと。二つ目は、輸出する商品のブランド・品質・安全性を、積極的にPRすることで輸出先での知名度を高めること。そして三つ目は、一つの商品を様々な産地(福岡県以外からも)から仕入れて、旬な商品を極力途切れなく輸出する仕組みを充実させることです。」とのこと。

今後はアジア以外、例えばEUや北米などにも新規の販路開拓に乗り出し、更には農産物以外の水産物、畜産物の輸出にも力を入れていくとのことだ。

海外との取引を成功させるために必要なことは、魅力ある商品を提供すること、常に創意工夫を怠らないことだと感じた。そして海外展開を目指す企業に対して、行政など関係機関のサポートも必要だと思った。

(報告者：原田祥太郎、大野香織)



出荷を待つ福岡県が誇るいちご(あまおう)

お話を伺った波多江淳治代表取締役

第3次研修

於：福岡県立社会教育総合センター
2015年10月17日(土)・18日(日)

海外研修渡航直前の宿泊研修。講師の方々からの熱いメッセージを受け取り、渡航への期待が高まるとともに、気を引き締めて海外研修に挑む決意を固めた。

10月17日(土)・18日(日)の2日間にわたり第3次研修が行われた。

初日はまず分野別班に分かれて、第2次研修のフィールドワーク成果発表を行った。その後は訪問国についての研修として、福岡で働いているタイ出身のナッタパット・ラットプラポットクンさん(男性)、ミャンマー人留学生のヘイン・ピエ・ピョーさん(男性)、ミャンマーから、福岡市水道局に技術研修生として派遣されているカイン・カイン・ソーさん(女性)の3名とグループディスカッションを行った。同年代の方々からタイやミャンマーの実情を直接聞くことができ、大変盛り上がった。

午後からは「ミャンマーで会社を18年経営した軌跡」と題して、ジェイサットコンサルティング代表の西垣充氏の講義を聞いた。西垣氏の話は、とても印象的で、氏が述べた「日本人であることに感謝をすること。日本人は恵まれている。ミャンマーでは日本の当たり前が当たり前ではない。ものがあることが幸せではない。自分というフィルターに気づき、自分を磨いてほしい。」という言葉には説得力が漲り、深い印象を受けた。

講義後は、生活班に分かれて、ミャンマーでの研修1日目、夜の夕食交歓会での出し物の内容について話を進めた。各班ともに日本の文化を楽しく伝えることができるよう、趣向を凝らしていた。

2日目には、「海外から見た福岡の魅力とその課題。具体的なビジネスの視点から。」と題してIT&IP社のアルド・ブロイゼ氏、みずトランスコーポレーションの水谷みずほ氏の講義を聞いた。講義では、ブロイゼ氏が日本人と外国人の視点の違いについて触れ、福岡の魅力について発信力を高める必要があると熱く語っていた。講義中、ブロイゼ氏と水谷氏による英語スピーチ指導もあり、海外視察研修で英語スピーチを行う団員の一助となった。

午後からは、オイスカ西日本研修センターの彦坂氏、ミャンマー人指導員のミョーさんの講義があった。講義では、オイスカの事業内容を知ることができ、またミョーさんの話では、ミャンマーオイスカ研修センターの情報も学ぶことができ、大変有意義だった。

その後、初日に引き続き、海外視察研修2日目の夕食交歓会で行う出し物の検討を行い、最後に、講堂において結団式が行われた。

重松典子団長から、各団員に団員証が手渡され、身が引き締まる思いだった。

11月8日からの海外研修では、社会人、学生としての自覚を持った行動を心がけ、研修地それぞれで多くを学び、今後の仕事、人生に活かしていきたいと改めて固く決意した。

(2班 市木 優貴)



「日本人に生まれたこと、それだけでラッキー」と語る西垣氏



海外から見た福岡について講義するブロイゼ氏と水谷氏



ミャンマーでお会いすることになるミョーさん

講義名	講師
訪問国研修	ナッタパット・ラットプラポットクン (タイ) ヘイン・ピエ・ピョー (ミャンマー) カイン・カイン・ソー (ミャンマー)
「ミャンマーで会社を18年経営した軌跡」	西垣充 ジェイサットコンサルティング代表取締役社長
「海外から見た福岡の魅力とその課題。具体的なビジネスの視点から」	アルド・ブロイゼ IT & IP Strategy Advisory Group SA 水谷みずほ みずトランスコーポレーション
「オイスカ・パコック研修センターについて」	彦坂延良 (公財)オイスカ 西日本研修センター 研修課長 ミョー オイスカ・パコック研修センター



身が引き締まる思いの結団式

副知事表敬

於：福岡県庁
2015年11月2日(月)

福岡県の大曲昭恵副知事を表敬訪問。直前に迫った海外研修に向けて、気持ちを引き締めた。

11月2日月曜日、青年の翼団員11名で福岡県大曲昭恵副知事を表敬訪問した。

表敬式では、団員それぞれが自己紹介をしたのち、団員を代表して古賀あゆみさんが青年の翼事業に参加させていただいた御礼と、直前に迫った海外研修に向けた決意を申し上げた。

決意表明を聞いた副知事から、タイやミャンマーへの海外研修の経験を通して、団員にはアジアの玄関口である福

岡を引っ張っていくリーダーとして育ててほしいと、期待を込めたメッセージを頂いた。

フリートークの場では副知事から海外研修に期待することを尋ねられた団員は、訪問先の企業や現地の学生などとの交流を通して、土地柄や文化を実際に体感したいと快活に答え、これからの海外研修に向けて団員の士気が高まっていくのを感じた。

(3班 東 宏輔)



団員代表の古賀あゆみさんによる決意表明



大曲副知事から激励の言葉を頂いた



大曲副知事、重松次長との集合写真



日程表

日次	月日(曜) DATE	都市名 CITY	現地時間 TIME	交通機関 C R	スケジュール SCHEDULE
1	2015年 11/8(日)	福岡空港	9:40		集合・出発式
		福岡発	11:40	TG649	空路、バンコク経由便にてヤンゴンへ
		バンコク着	15:40		
		バンコク発	18:05	TG305	
		ヤンゴン着	18:50		着後、ホテル
2	11/9(月)		4:45	専用車	朝食後 ホテルより空港へ移動
		ヤンゴン発	6:00	YJ893	
		バガン着	8:40		バガン(ニャンウー空港)着 専用車でパコックへ移動
		バガン→パコック		専用車	(公財)オイスカ・研修センター 視察 (チャウカー村、小学校訪問等)
		パコック			夕食交流会
3	11/10(火)	パコック	早朝	専用車	農業体験
			10:30		パコック市場見学
			12:30		昼食後、バガンへ
		パコック→バガン	14:00		バガン市内・タウンビー村(馬車の村)視察
4	11/11(水)		午前・午後	専用車	バガン市内視察(日本人慰霊塔・パゴダ史跡・漆工房等)
		バガン発	16:45		バガン(ニャンウー空港)発→ヤンゴンへ
		ヤンゴン着	18:35		
				専用車	ホテルへ移動 夕食交流会(ミャンマー在住の福岡県関係の方々)
5	11/12(木)	ヤンゴン		専用車	○ジャンクション・スクエア・ショッピングセンター 視察(産業) ○日本人墓地 福岡県ミャンマー戦没者慰霊碑 献花(社会貢献)
		ヤンゴン	14:50	TG302	
		バンコク	16:45		着後、ホテル タイ舞踊鑑賞(文化)
6	11/13(金)		午前	専用車	全体研修 ○チュラロンコン大学付属小学校訪問(人材育成・教育) ○Team Consulting Company訪問(まちづくり) ○MRT FOODS THAILAND訪問(産業政策)
		バンコク	午後		夕食交流会(県人会・留学経験者・関係機関等)
			19:00		
				専用車	全体研修 ○バンコク市内視察 ・伊勢丹・エンポリウム 視察(産業) ・エメラルド寺院、旧王宮(文化)ほか
7	11/14(土)	バンコク			夕食後、空港へ
			21:00		空港着
8	11/15(日)	バンコク発	1:00	TG648	空路、帰国の途へ
		福岡着	8:00		

ミャンマー／出発式及び移動

11月8日(日)

少し緊張気味の出発式を終え、ミャンマーへ向け福岡国際空港を出発。

海外研修への出発日。福岡国際空港に9時40分に集合した。ひと月ぶりに会う団員同士近況を報告し合いながら、搭乗手続きを済ませた。その後の出発式では、重松団長はじめ県庁の方々から激励をいただき、団員全員が身を引き締める思いだった。県庁職員や保護者に見送られ、出発手続きを終え、はやる気持ちを抑えながら出発までの時間を待った。

飛行機に乗り込み、ミャンマーへ向け福岡国際空港を出発。経由地であるバンコク・スワンナプーム国際空港まで約4時間のフライトであったが、これからの研修に各自期待を膨らませ、あっという間に到着した。空港は洗練されたデザインで、とても広かった。乗り継ぎまでの待ち時間、空港内の散策を楽しんだ後、いよいよミャンマーへと向かっ

た。

ミャンマー・ヤンゴン国際空港に着いて感じた事は、東南アジア特有の「蒸し暑さ」と「静かさ」だった。というのもミャンマーではその日、総選挙が行われており、選挙による混乱を予想していたが、飲食店なども閉っており、町全体が静かだった。またヤンゴンは渋滞がすごいと聞いていたが、選挙中なので、ホテルまですぐに行く事が出来た。ヤンゴンの街並みは、近代的な建物と狭間に見えるライトアップされた寺院などが目立ち、福岡では見る事の出来ない景色を車窓から楽しんだ。チェックイン後はホテルのレストランで食事をし、翌日から始まる海外研修に備え早めに就寝した。

(1班 渡辺将太・早戸純一)



少し緊張気味の出発式



世界の主要都市へつながるバンコク・スワンナプーム空港



歩き回ると迷子になりそうなほど広い空港内



ホテルから見たヤンゴン市内の夜景

ミャンマー／移動&オイスカ・パコック研修センター 11月9日(月) AM

農業を通して地域のリーダー育成に取り組んでいる NGOオイスカのパコック研修センターへ。

ヤンゴン→バガン→パコック

朝6時発の飛行機だったが、空港は人で溢れていた。手渡されたのは名前の記載もない全て手書きの搭乗券。係員が搭乗券を詳しく確認することもなく、我々は小型のプロペラ機に乗り込み、バガンへと飛び立った。

1時間半のフライトを終え、大型バスでパコックを目指した。道路は整備されているものの、外れの方を見ると草が生い茂っており、道と呼べるものは我々が走っている道路しか見当たらなかった。道中、ヤンゴンで目にしたような高い建物はなく、竹を組み合わせて作った壁に大きな葉を何枚も重ねた屋根の家屋やヘルメットも被らずバイクに3人乗りする姿、大量のヤギが放牧されているのを目にした。ほんの数時間中心都市ヤンゴンを離れただけで激変した風景に驚きつつ、オイスカ研修センターへと向かった。

オイスカミャンマー農林業研修センター

オイスカは農業を通して地域のリーダーとなれる人材の育成に取り組んでいる日本のNGOだ。ミャンマー全土から選ばれた18～26歳の私たちと同世代が、研修生として農業知識・技術や日本語を学んでいる。センターの概要を聞いた後、圃場や畜舎を見学した。「ここで学べる知識や技術をたくさん身につけて、自分の村に帰ってふるさとを豊かにしたい」と夢を語る研修生たちは輝いていて、ディスカッションタイムは自分自身について考える時間にもなった。

日本式の研修は農業技術だけでなく、「時間を守る」ことなど、今後若者が活躍する基礎となるそうだ。毎日5時に起きてラジオ体操と朝の清掃から始まる生活。この日は我々もこの施設で寝食を共にさせてもらった。

(2班 福岡静・古賀あゆみ)



ミャンマーの伝統的家屋



センターの方のお話熱心に耳を傾ける団員達



センターで栽培されていた日本米を観察



研修生とのグループディスカッション



センターの宿泊部屋。とっても快適でした！



豚舎の子豚。いただきますは「命をいただきます」の意味だと実感。

ミャンマー／チャウカー村&オイスカ研修センターでの夕食交歓会 11月9日(月) PM

チャウカー村の小学校を訪問。尊敬の意を示す「腕組みポーズ」で温かく出迎えてくれた。

チャウカー村

チャウカー村では、学校を訪問した。学校に着くと、腕組みをした多くの子どもたちが行列を作って温かく出迎えてくれた。この腕組みのポーズは、目上の人たちに対する尊敬の意を示すとのこと。中に入ると、自然に囲まれた教室を見ることができた。日本から持ってきた折り紙を使い、子どもたちに飛行機の作り方を教えたり、その飛行機を使って外で飛ばして遊んだりした。また、ボールや縄を使って遊ぶなど現地の子どものとたくさん触れ合うことができた。子どもたちは、日本の遊びにとっても興味を示していて目を輝かせながら取り組む姿はととても印象的だった。

オイスカ研修センターでの夕食交歓会

オイスカ研修センターでの夕食交歓会では、たくさんのミャンマー料理を振る舞っていただいた。また、ミャンマー衣装を身にまとった研修生たちがミャンマーの踊りを披露してくださった。私たちからは、日本にまつわるクイズや書道、日本の伝統的な遊びである福笑い、二人羽織、普段ミャンマーの方が触れることの少ない日本の衣装や踊りを披露し、スタッフや研修生の皆様にとっても喜んでいただいた。

そして、この交歓会を通してより一層ミャンマーの方々と交流を深めることができた。夕食交歓会の最後には、ミャンマーの踊りを教えていただき、全員が輪になって踊り、とても楽しく有意義な時間を過ごすことができた。

(3班 甲斐紗由美・安部日向子)



チャウカー村の小学校で子どもたちのお出迎え



初めての折り紙に興味津々の子どもたち



夕食交歓会。研修生が腕を振ってくれた御馳走とよく冷えたミャンマービール



伝統舞踊や楽しいレクリエーションで大盛り上がり！忘れられない夜になりました

ミャンマー／オイスカ・パコック研修センター 11月10日(火)

現地の農業、市場を視察。ミャンマーの生活に触れた1日。

パッカンジの市場視察

朝6時、市場を視察するため、オイスカ研修センターから車で3分ほどのパッカンジの市場へ向かった。市場には飲食店や日用品を販売する小さな店が十数店舗立ち並び、付近で収穫された野菜や魚、肉を販売する露店が立ち並んでいた。早朝にも関わらず、買い物客や商品を搬入する人で賑わっていた。

小さな個人商店(電気店)をふと覗くと、店には日本製品がほとんどなく、中国や韓国製品が占めていた。特にスマートフォンの棚には、韓国企業の「サムスン」「LG」中国企業の「ファーウェイ(HUAWEI)」、マイクロソフト傘下の「ノキア」が並んでいた。

同国では、2013年に通信市場の開放や、SIMカードの大幅値下げがなされたこともあり、近年携帯電話が急速に普及したとのこと。日本以外のメーカーの製品が並ぶ様子を見て、既にこうしたコモディティ製品では日本企業のつけないすきは無いと感じた。

オイスカ研修センターでの農業体験

研修センターの方が腕を振ってくださったとても美味しい朝食を頂いた後、「農業」「野菜」「養豚」「食品加工」の4分野に分かれて実地体験を行った。

「農業」の分野では、ひまわり畑の草取りを体験。油を採るためひまわりを栽培しており、強アルカリ性で植物が育ちにくい土壌を改良した畑では、雑草も多く生えており、それらを手作業で抜く作業を行った。センターの皆さんから指導を受けつつ、片言の日本語を交わしながら、約2時間の農作業を行った。この草取りが豊作につながって欲しいと心から祈った。

「食品加工」の分野では、パン作りの生地作りを体験。完成したパンは、日本で市販されているパンと比較してサイズが少し小さかった。市場では約200チャット(約20円)で販売しており、特に「ひよこ豆のあんパン」は人気があるようだ。

「野菜」のグループは、カボチャからパパイアに植え替えを行う畑の草取りを、「養豚」のグループは、子豚に土の免疫を付けるために行う注射の作業を体験させて頂いた。研修生は4分野を1週間交代で担当するようだ。

パコック市場視察

研修センターから南西へ約1時間、パコック県の中心地に位置する、人口約13万人(平成8年調べ)のパコックの街の市場を視察した。

周辺は車やバイクが行き交う賑やかな繁華街で、歩いて10分ほどの大きなエリアに布張りのアーケードからなる大きな商店街が位置する。中には食料品や調味料、加工食品を扱う店の他、化粧品や衣料品を扱う店が多く立ち並んで

いた。同国の民族衣装である「ロンジー(巻きスカート)」は2000～5000チャット(日本円で約500円)で多彩な色柄があって団員はみな争って購入していた。ロンジーは通気性に優れる上に同国の正装と見做されることから、ドレスコードが課される寺院やパゴダの訪問にこの後大いに役立つことになった。

(1班 原田祥太郎・鯉川聡)



パッカンジ市場の様子



農業体験。みんな頑張りました!



パコックの市場で発酵した紙タバコに興味深そうに手に取る団員

ミャンマー／パコック・バガンそしてタウンビー村 11月10日(火) PM

オイスカの過酷で楽しい農業体験を終え、馬車の村といわれるパコックのタウンビー村を訪問。

タウンビー村(馬車の村)訪問

午前中のオイスカ研修センターでの過酷な農業体験を終えた後、午後はパコックの馬車の村といわれるタウンビー村を訪問した。現在は、馬車を使って観光地を回るのが観光客に人気のようで、バスの中から町を見学していると、馬車をよくみかけた。村の訪問では、馬車には欠かせない馬や馬具のメンテナンスを見学し、想像していたよりも馬が大きくて驚いた。実際に馬車をひく馬のひづめを守るための馬具を取り付けているところを見て、馬具のメンテナンスの技術が代々受け継がれていることを知った。メンテナンスの説明の後、実際に馬車に乗せてもらった。馬車には一度に2.3人が乗ることができ、ひとつの大きなシートに馬車の横や後ろから乗車するシステムになっていた。実際に乗ってみると高さがあったり少し怖かった。馬車をつかって観光ができるサービスは、伝統を守りながら観光客に楽しんでもらうことのできる良いビジネスとなることが分かった。



馬車に乗る福岡のオトメたち



馬を飼育する迫力ある表情のおじさん

パゴダからの夕日観賞

ミャンマーと聞くとよく代表して言われる「パゴダ(仏塔)」のうえにのぼってそこからの夕日を観賞した。大きなパゴダに5つのステージがあり、ガイドのチョウさんによると、3か4のステージから観賞するのがお勧めだそうで、私はよけいな性格なので、そのステージのすべてから夕日の観賞を楽しんだ。天候にも恵まれ、素晴らしいパゴダの景色と、ミャンマーの美しい夕日のコラボレーションを観賞することができた。その景色は本当に美しく、最初に見たときは感動でそのまま時間が止まってしまうほどで、どれだけ見ても飽きない美しさだった。パゴダも良く見ると一つ一つそれぞれ違いがあって、作った人の、宗教や予算で大きさや形の違いが生まれているようだ。その違いがさらにその景色の美しさを際立たせていた。あの美しい景色は、今後も決して忘れることは無いだろう。

(2班 井上侑希)



シュエサンドーパゴダの上からこんにちは



息をのむほど美しいパゴダから眺める夕日

ミャンマー／バカン視察

11月11日(水) AM

ミャンマーの誇るバガンの遺跡群を視察し、
現地の僧院に建てられた日本人慰霊碑に黙祷を捧げた。

団員は、まったく環境の違うミャンマーにも慣れてきた様子だった。この日は、バガンを視察した後、ミャンマーの旧都市ヤンゴンに向かった。ホテルを出発してヤンウー市場に着いたのが9時。市場はたくさんの人で賑わっていた。現地の方々はみな頬っぺたに日焼け止めのタナカを塗り、食べ物を地面に広げて売っていた。市場では異国情緒あふれる光景に新鮮さを感じながら、ミャンマー独特の雰囲気を見ることができた。次に訪れたのがシュエジゴンパゴダ、900年以上の歴史がある寺院だ。ミャンマーの

寺院内には裸足で入るのがルールで、靴を脱いで見学した。寺院は金色に光っていて迫力のある光景だった。敷地内は広く、一時間ほどガイドの方の説明を聞きながら寺院を回った。バガンでは、平地にボコボコとたくさんの寺院が建っている景色が見られた。その中でも最も大きな寺院であるタビニュー寺院を午前中最後に訪れた。その近くの僧院には日本人の慰霊碑が建てられており、団員は黙祷を捧げた。日本から遠く離れた異国の地で命を落とされた方々を想うと、複雑な気持ちになった。(3班 糸数基樹)



露店が並ぶヤンウー市場の様子



バガン最大のタビニュー寺院



金色に輝くシュエジゴンパゴダの前で



毎日花が供えられている日本人慰霊碑

ミャンマー／バカン視察

11月11日(水) PM

バガン遺跡最大級のアーナンダ寺院を視察した後、
漆工房を訪問し、ミャンマーの伝統工芸の奥深さに触れた。

アーナンダ寺院見学

まずはバガン遺跡のパゴダの中でも最大級を誇るアーナンダ寺院の視察からスタートした。お土産を売る人々の活気溢れる参道を進むと、東西南北それぞれに祀られた4体の仏像が目飛び込んできた。

この4体は現在の世界に登場した最初の4体であるとのこと。金箔に包まれた巨大な仏像を見ていると、心を見透かされているようだった。仏像を見る場所によって、「表情が陰しく見えたり」、「微笑んでいるように見えたり」と不思議な感覚に襲われた。

伝統的な漆工房を見学

バガンはミャンマー最大の漆器生産地であるようだ。今回はその一つの漆工房を見学させていただき、日本とは違う漆工芸技術を見ることが出来た。日本の工芸とは違い素地は木だけでなく、竹を使いカラフルな模様を施すのが特徴である。

作成手順は、①竹や馬の尻尾の毛を編んだものに漆を塗り、②漆器を削りながら模様を付け、③カラフルな色や金箔を付けながら磨かれていく。一つ一つ細かい作業を従業員たちが真剣に作っていく姿を見学し、伝統工芸の奥深さを感じた。



大迫力のアーナンダ寺院



心を見透かされるような神々しい仏像

現地で活躍されている方々との夕食交流会

バガン視察を終え、国内線飛行機でヤンゴンへ向かった。ヤンゴン到着後、ミャンマーの現地で活躍されている日本人3名をお招きし、夕食会を開催した。初めは緊張気味だった団員たちも徐々に緊張がほぐれ、激辛鍋を囲みながらミャンマーの現状についてお話を伺った。

- ・西垣 充さん(ジェイサットコンサルティング代表取締役) 第3次研修でも講義を頂いた。ヤンゴンで起業されてすでに18年。ミャンマー社会の発展に寄与すべく、日系企業進出サポートやメディア取材のコーディネートをしている。
- ・吉田 実さん(JICA専門家) 北九州市のご出身。ミャンマーのケシ栽培撲滅のために、ケシの代替作物であるソバ・ハトムギを導入するため活動されている。
- ・渡辺 桂三さん(福岡市水道局からヤンゴン水道局に出向中) 福岡市の水道環境技術を導入し、ミャンマーの水道環境を変革すべく現地入りされた。

日本にいる限り聞くことの出来ない、ミャンマーの歴史やメディアでは報道されることのないミャンマーの現実を知ることが出来た。こういった現実を若い団員たちが、日本にいる人々へ伝えることが重要だと感じた。

(1班 大原未流斗・箕原あおい)



漆工房で作業する職人



夕食交流会に参加頂いた皆さんを囲んで

タイ・バンコク／ヤンゴン

11月12日(木) AM

第二次世界大戦においてビルマ戦線で戦没した日本人を慰霊する「日本人墓地」を訪問。敷地内にある「福岡県ミャンマー戦没者慰霊碑」に、団員一同で黙祷を捧げた。

初めに、ミャンマーの最大のデパート「ジャンクション・スクエア・ショッピングセンター」を視察した。辺鄙な周りの風景からは一際浮いた、近代的な建物だった。中にはダイソーやスーパーマーケット、家電製品店、ブランド店などが入り、日本のデパートと同じように感じた。ダイソーはほとんど日本と変わらない様相であり、スーパーマーケットでは食品やベビー用品などに日本製品も数多く見ることが出来た。田舎のマーケットでは生鮮食品を、ハ工がたかる中、ありのまま売っていたのに対し、こちらではしっかりとパック詰めされて売られていた。平日の午前中だったからか、客が多いわけでもなく、やはりここは富裕層ターゲットの建物になっていると思った。団員は、

ガイドのチョウさんお勧めのカシューナッツのお菓子やミャンマービールなどをお土産に購入していた。

次に、第二次世界大戦においてビルマ戦線で戦没した日本人の墓地を訪れ、団員一同、戦没者に黙祷を捧げた。敷地の至るところに、平和を祈る記念碑とお墓が見受けられた。この日も日差しが強く、うだるような暑さだったが、こんな暑さの中ろくに食事もとれず、一人孤独に亡くなっていった人々がいると思うと胸が痛んだ。同時に、いかに現在の私たちが恵まれた環境にあるのかを改めて実感した。

ここでガイドのチョウさんとお別れしてミャンマーを後にし、タイへ向かう飛行機へと乗り込んだ。(2班 横尾春菜)



ジャンクション・スクエアを視察中の団員



清潔なスーパーマーケット



手入りの行き届いた福岡県ミャンマー戦没者慰霊碑



ビルマ平和記念碑



真剣な表情で記帳する団員
(ビルマ平和記念碑にて)

タイ・バンコク／ヤンゴンからバンコクへ

11月12日(木) PM

アジアのラストフロンティアと呼ばれるこの国が、今後どのように発展していくのか。いつか再び訪れたい・・・

今までにない感動と経験を与えてくれたミャンマーという国に別れを惜しみつつ、タイでの新たな体験への期待とともに、一同、空路でヤンゴン空港からバンコク空港へと移動した。機中から見えるヤンゴンの景色に、幹線道路を走る車の渋滞の列が目立っていた。アジアのラストフロンティアと呼ばれるこの国が、今後どのように発展していくのか、農村部との経済格差は益々広がってしまっているのか・・・など、想いを巡らせていると、初日とは違った視点を持っている自分に気づかされた。そして近い将来再び訪れたいという強い気持ちが芽生えた。

2時間程のフライトを経て到着したタイの首都バンコク。これからの研修に胸躍る我々を、もはや世界的にも有名となった交通渋滞という洗礼が待っていた。予想はしていたものの、それを遥かに超える込み具合、気づけば見渡す限りの道路がすべて車で埋まっており、踏切の中にも車

が停車していた。タイが抱える国家的問題についての恐ろしさを肌で感じる事ができた。移動には2時間以上かかり、夕食会場に到着時は空腹と疲労でぐったりしていた。

夕食はSILOM VILLAGEにて本格的なタイ料理(トムヤムクン、グリーンカレー等)とともに、伝統的なタイ舞踊を堪能した。料理は日本人好みのスパイシー加減であったが、私が一番気に入ったのは春雨入りのパリパリ春巻きで、普段日本で食べているものが恋しくなってきたと感じた。観賞したタイ舞踊の内容は、ラーマキエンというインドから伝わった物語で、王族に攻めてきた鬼を倒すために、猿に力を借りて倒すというものだった。最後に王族が勝利し舞踊が終わった際、蛍の光が流れ始めた為、閉店だということが分かり、日本との意外な共通点を見つけることができた。

(3班 緒方亮介)



前後左右どこにも進めないバンコクの渋滞



SILOM VILLAGEの前での集合写真



タイの伝統舞踊。すごい迫力!

タイ・バンコク／チュラロンコン大学附属小学校 11月13日(金) AM

国立大学附属小学校の授業を見学し、日本の小学校教育の在り方について考えた。

訪問概要

- ・チュラロンコン大学は、1917年に設立されたタイ王国において最も古い歴史をもつ、権威ある国立大学。タイ国内では、日本の東京大学のような位置付け。
- ・人材・教育班を中心として、日本の教育における問題点「自尊心の育成」「国際的に活躍できる人材の輩出」等に対して、今後の日本教育の在り方を考察する為、訪問。小学校内の施設見学、実際の授業の視察、チュラロンコン大学の教師、職員の方々とのディスカッションを行った。

学校内の施設

- ・特別支援学級
基本的な数字の計算やお金の貯め方等実生活に活用できる内容を重視。
- ・図書館
図書その他、パソコンやテレビが備え付けられており、社会的なモラルから国際情勢まで幅広いジャンルを学ぶ為の小学生向けアニメ等も用意されていた。

授業見学

- ・外国人の先生や最新鋭の英語教材を使用する等英語教育における環境整備の水準の高さが窺われた。
- ・生徒が楽しみながら学べる様に、先生方の工夫がなされていた。生徒の英語の習得状況についても、日本の水準より高い様に感じた。

ディスカッション

- ・チュラロンコン大学附属小学校での教育方針は、子供の好きなこと、興味ある分野を中心に伸ばすことで社会活躍できる人材の育成とのこと。
- ・学校教育の内容については、「1、2年生は楽しいことをする」「3、4年生は好きなことを発見する」「5、6年生は自分を深く理解し、深める」ことを重視。基礎的な学習(算数、英語等)と興味のある分野の学習に係る時間は学年により異なる。
- ・柔軟な学習体系を取る為に、学校周辺の地域や大学との連携も重視し、授業には多種多様な講師の方を招聘している。

感想

- ・第二次研修で訪れた「きのくに学園北九州子どもの村小学校」同様、子どもの好きなことを伸ばす教育は、子供の能力を伸ばすには最適な教育の方法だと感じた。学校内で子供達が楽しそうに学習する様子が印象的であり、何より自分の興味のある分野を自ら見つけ出し、自分の意志

で伸ばすことは社会に出てからの自律心を養う上でも有効だと思った。
・今後、日本における教育でも、官民ともに教育環境の整備を行い、このような取り組みが増え、国際社会で活躍できる人材が多く輩出されることを期待したい。
(人材育成・教育班 三角拓也)



恵まれた環境で元気いっぱい子どもたち



最新鋭の設備が導入されたIT教育環境



温かく視察を受入れて下さった校長先生を囲んで

タイ・バンコク／TEAM Group of Companies 11月13日(金) PM

バンコク都の交通整備計画にも携わるコンサルティング会社“TEAM Group of Companies”を訪問した。

まちづくり班では、バンコクで運輸や大型インフラのコンサルティングを専門とし、バンコクの交通整備計画にも携わるTEAM Group of Companiesを訪問した。同社では、バンコクの交通計画策定に関する背景や計画について話を聞くことができた。

現状

世界有数の渋滞都市として知られるバンコク。朝夕のラッシュアワーを中心にバンコク都心部の道路はもちろん、高速道路も激しい渋滞が発生する。
一方、都市内の輸送を目的とした公共交通として、民間主導による「BTS（高架鉄道）」のほか、国やバンコク都庁等が所有や運営を行う「地下鉄」「空港連絡鉄道」「BRT（Bus Rapid Transit）」「チャンネルポート（船舶）」「市内バス」「タクシー」が存在する。

バンコクの都市交通の今後

軌道系交通機関の整備が遅れていたバンコクでは、現在100kmを超える軌道系交通機関の整備計画が立案される他、都市内交通の見直しが行われている。その動きは、「鉄道とバスのフィダー接続」「LRTの導入」など、日本でも既に議論されている内容と同様だ。
またバンコクの交通政策は、環境対策の面からも重視されている。バンコクの一人当たり二酸化炭素排出量は10.6トンと世界平均の約2.5倍と高い水準にあり、そのうち49%が輸送部門から排出されている。2007～2012年の5年間で、何もなかった状態と比較して温室効果ガスを少なくとも15%削減することを目指し、「バンコク都気候変動対策実行計画」が進められた。その計画で取り込まれる5分野の一つに「大量輸送網システムの拡大」が盛り込まれ、渋滞解消に向けた鉄道網の整備が進められるきっかけとなっている。

福岡でも導入に向けた検討が進められるBRT—バンコクの現状

現在福岡市でも、「天神ビックバン」の一環として導入に向けた検討が進められているBRT「バス高速輸送システム（Bus Rapid Transit）」について、バンコクでは2010年に導入された。現状では、「定時制・速達性の確保」の点で問題が生じている。当初は道路中央部にBRT専用の走行路を設け、交通渋滞と関係なく走行できる環境を設けていたが、一般道の渋滞が激しくなりすぎたことから、バス停部分以外の専用走行路を一部廃止した。同社の幹部は「元々想定していなかった道路の使用法であり、問題が生じた」と話した。
この問題は、福岡市においても他人事ではない。第二次研修で行った福岡市訪問においても「(速達性の確保に有効な) BRT専用レーンの設置については、今後市民の声を踏まえながら検討」に留まっており、設置の見通しは立っていない。仮にBRT専用レーンが設置された場合においても、道路渋滞が激しくなることも想定されることから、パーク・アンド・ライドのより一層の推進や自動車の進入制限など、都心部の自動車の数を減少させる施策を同時に進める必要があると感じた。
(まちづくり班 鯉川 聡)



渋滞が激しいバンコク中心部



市民の足BTS



TEAM Group of Companiesの皆様と

タイ・バンコク／MRT FOODS THAILAD・ISETEN視察

11月13日(金) PM
11月14日(土)

タイでどのように日本の農産物が売られているのか、その実情について学んだ。

MRT FOODS THAILAD代表取締役の小村真衣香様とのディスカッションは、バンコクの交通渋滞のため、急遽、夕食交流会の会場へと向かう道中の車内で実施頂くこととなった(小村様には改めて御礼申し上げます)。近年タイで販売量が増え続ける日本産の農産物、その最前線では実際にどのような事業が展開されているのかについてお話を伺った。

小村様は、日本のブランドを活かして、日本全国から美味しく新鮮な農産物をタイへ輸入し販売しているバイタリティ溢れる女性社長だ。

日本全国へ足を運び、自らが選定し厳選した商品を船で月1回、飛行機だと2～3日に1回の頻度でタイへ輸入しており(船では品質上長持ちするものや加工食品を、飛行機では鮮度重視の生鮮食品のみ輸送)、日本ブランドの信頼を損なわないように品質管理を徹底し、社員総出で検品、検量、検質を行っているとのこと。形や大きさなど規格から外れた商品はジャム等の加工商品用として販売することで廃棄ロスを無くし、コスト削減にも努めているとのことだった。

最近では日本産商品を真似たコピー商品も出回っており、登録商標をそのまま使い日本産と謳って販売されていることもあるそうだ。福岡県のイチゴ「あまおう」はとりわけ人気があり、コピー商品をはじめ、あまおうに似せた品種改良が行われているとのこと。しかし、裏を返せば日本産農産物の人気の現れであるかもしれないと感じた。

「今後は、輸送コスト削減によって値段を下げたり、新商品の提案やPR活動、試食会などを積極的に行ったりして、価格を下げて知名度を上げ、より多くの人達に食べてもらいたいと思っています。」とのこと。日本の農産物を世界に

売る、売り込む、その最前線で奮闘している小村様からは大変大きな刺激を受けることができた。

次の日には、日本の農産物が販売されている現場を見るべく、バンコクISETENを視察した。農産物コーナーには日本産の野菜や果物が陳列され、無農薬野菜や有機野菜も販売されていた。MRT FOODS THAILAD社の商品も数多く陳列され、巨峰、柿、なし、それらを加工したゼリーやジャム等も販売されていて、小村様から伺ったお話を実見することができた。

日本産農産物の横に、韓国産やNZ産も並べられており、比較的安い価格で販売されていた。小村様によれば、韓国は農業地の整備をはじめ、農産物の鮮度維持技術が向上してきており、近年輸出量を大幅に伸ばしてきているとのこと。こういった競合品に対抗するためには、日本政府の更なるサポートが必要だと感じた。

ISETEN内にあるスーパーには日本語対応スタッフが配置されており、現地に住む邦人が安心して買い物を行うことができている。また、タイでは日本と違いほぼすべての商品に英語のラベルも貼られていて、居住する外国人への配慮がなされていた(タイ語の表記が非常に難しいことも一因かもしれない)。

このようなサービスは、福岡も一層取り組んでいく必要があると感じた。特に、韓国や中国といったアジアからの旅行者が多い福岡では、外国人を対象にしたサービスの一環として英語や中国語、韓国語などが話せるスタッフを増やして、日本産農産物の良さを知らせ、帰国後も日本産農産物を手にとってもらうようにすることが、海外輸出拡大の一手でもあると感じた。(産業政策班)



バイタリティ溢れる MRT FOODS 小村様と(真ん中)



伊勢丹の店頭で販売される長野県の梨(MRT FOODSが輸入)



ガイドの方と真剣に品定め



日本産の隣に陳列された韓国産のイチゴ

タイ・バンコク／夕食交流会

11月13日(金) PM

現地で活躍する、福岡県とゆかりのある方々や大学生をご招待し、交流を深めた。

現地で活躍する福岡県とゆかりのある方々や日本に関心のある学生など、約70人もの方々にお越し頂いて夕食交流会を開催した。当日は、タイ特有の交通渋滞に巻き込まれながらも、開始1時間前に到着し、段取り、各団員の役割分担等準備を進め、予定通り交流会を行うことが出来た。

団員を代表して、市木さんが英語による気持ちのこもったウェルカム・スピーチを行い、福岡県人会の会長である岡本様に乾杯の御挨拶を頂いて始まった交流会は、想像以上に盛り上がり、団員それぞれが現地で活躍する日本の方々や現地の学生と交流を深め、興味深い話を聞くことが出来た。

私自身も、現地で活躍する日本の方々から、企業の目線から見たタイの現状や海外赴任における苦労話等、日頃自分では経験できない様な話を聞くことができ、非常に興味深かった。また、タイの学生からはタイ独自の習慣やタイ

国内の事象等を聞き、逆にこちら側からは日本で流行している物や事を教える等交流を深めることが出来た。

盛り上がりを見せた交流会もあっという間に終わり、団員は皆、まだ話足りていないという様子であった。今回の交流会を通じて、普段、なかなか関わりを持つことが出来ない方々と交流を深められたことは貴重な経験だった。この交流会を通じて、現地で活躍する日本の方々を見て、私自身もそれに負けないくらい頑張らなければならないと改めて思った。また、タイの学生を前にして、もっと日本のことを知ってもらう為にも、私自身が今以上に日本という国について理解を深める必要があると感じた。

ご多忙中にも関わらず、今回の交流会に参加して頂いた皆様には心より御礼申し上げます。

(3班 三角拓也)



夕食交流会に参加下さった皆様との集合写真



熱意のこもった団員代表市木さんによるウェルカム・スピーチ



「また会おうね!」再会を約束しました

タイ・バンコク／バンコク視察

11月14日(土) AM

1782年にラーマ1世が建設した荘厳な王宮とその南側に位置するワット・ポーを視察し、仏教文化を学んだ。

午前中、バンコク中心部から西へ約4km、1782年にラーマ1世が建設した王宮を視察した。約21万8千㎡な敷地には当時、国王の宮殿の他に、即位式の建物、王室守護寺院のほか、宮内庁や官庁などの省庁が建設されたそうだ。

王宮の敷地内でまず目を引いたのが「エメラルド仏寺院」だ。金色に輝く寺院の外壁には、色とりどりの陶器の欠片が埋め込まれ、艶やかなその外観に圧倒された。この破片は、建設当時、中国から船で輸入されていた陶器のうち、輸送中に割れたり、ひびが入ったりなどして、売り物にならなくなったものだそうだ。それを当時の王様が見かねて、寺院の外壁にちりばめ、そのモザイクが綺麗な外観をつくりだしていることから、「エメラルド仏寺院」と呼ばれるようになったとのことだ。

本堂に安置されているエメラルド仏は、タイ国の本尊仏として崇められていて、見学中も、外国からの観光客のほか、多くの市民が祈りをささげていた。

次に王宮の南側に位置するワット・ポーを視察した。この寺院には巨大な涅槃像が安置されており、大きさは全長46メートル、高さ15メートルと、篠栗町の南蔵院の涅槃像より5メートルも長いものだった。涅槃像が安置される本殿には、螺鈿の細工が壁から天井のいたるところに施され、荘厳に光り輝く涅槃像と合わせて、見る者を魅了していた。

続いて、チャオプラヤ川の対岸に位置するワット・アルンを視察した。寺院では工事が行われており、外観のみの視察に留まったが、その歴史と仏教信仰の文化を学ぶことが出来た。(1班 原田祥太郎)



豪華な寺院を背景にして



国王の宮殿前にて



見る者を魅了する巨大な涅槃像



チャオプラヤ川を渡る船の上で

タイ・バンコク／バンコク視察

11月14日(土)

バンコク中心街にある大型商業施設セントラルワールドを視察し、バンコクの日常に触れた。

昼食に日本のしゃぶしゃぶに似たタイスキという、タイの有名な食べ物を堪能した後、バンコクの中心街にあるセントラルワールドという大型商業施設を視察して、タイの商業について学んだ。セントラルワールドのある場所は電車やバスなどの交通網が整備されていて、高層ビルなども立ち並び、BTSチットロム駅からスカイウォークで直結しているため、非常に交通の便のよい印象だったが、街の中心部へ向かう幹線道路は渋滞しており、交通インフラはまだ課題が多いと感じた。また、2015年8月17日に爆発テロ事件が起きた場所では献花台が設けられ、多くの人々が花を手向けお祈りをささげていた。

セントラルワールドで売られている商品は、品質、値段ともに日本とは全く変わらなかった。露店で売られているものとは衛生環境や値段が全く違って、タイは日本よりも物価が安いと思っていたが、こうした大型商業施設に限って言えば、そうではなかった。

また、フロアの一角には、日本料理レストランが数店舗あり、多くの人で賑わっていた。調味料や冷凍食品も販売されていて、日本産の刺身や農産物も販売されていた。いわゆる、日本国内で健康によいとされている商品が店頭と並んでいるといった印象を受けた。

(1班 今村・原田・渡辺)



バンコクの交通渋滞の様子



利便性の高いBTS



買い物客でにぎわうセントラルワールド内部の様子



夜まで賑わうセントラルワールド周辺



爆破テロが起こった現場。花が絶えなかった

最終日 一路バンコクから福岡へ

11月14日(土)夜～深夜

さまざまな体験を共にした仲間たちと帰国の途に。

長かった研修も終わりに近づき、最後の移動となった。タイでの自由時間を楽しみ、海外研修最後の夕食をとった後、スワンナプーム国際空港に向かった。現地時間1:00バンコク発・8:00福岡着で約5時間のフライトを前にして、もう少し研修が続けばと思う気持ちがあったり、早く帰国したい気持ちがあったりと複雑な心境のまま飛行機に乗った。機内では、一週間の疲れからかすぐに眠りに落ちていく人もいれば、研修の余韻に浸りながら残りのフライト時間を楽しむ人もいて、それぞれの時間を過ごした。

思い返せば長いようで短く、しかし内容がとても濃く(その中でちょっとしたトラブル等もあったが)、たった1週間

だとは思えない非常に充実した密な海外研修だった。オイスカ研修センターから始まり、ミャンマー・タイ両国でたくさんの方々と交流し、日本とは違う環境や文化・歴史などに触れ、皆にとって有意義な研修になったと改めて思う。

海外研修は終わったが、研修はこの後も続いていき、研修が終わっても職場での活動や地域への貢献など、今後も様々な活動が各々続いていくと思う。今回海外研修における現地で見聞きし感じたこと、学んだことを自らの成長の糧にしていき、各々の場所でその成長を見せていけたらと思う。(2班 勝谷崇寛)



海外研修最後の晩餐は・・・カニ！



バンコクとの別れを惜しんで？みんなでポーズ！



無事に迎えた解散式。お疲れ様でした。

第5次研修

於：福岡県立社会教育総合センター
2015年12月5日(土)・6日(日)

帰国後すぐの宿泊研修。人権・同和研修や循環社会について学ぶとともに、これまでの分野別研修の成果発表を行い、今後の実践活動や報告書のアイデアを練った。

(研修概要 1日目)

人権・同和研修

・日本における非差別部落の歴史

日本の歴史上、日本の非差別部落の人々は専売権等特権を与えられていたが、明治政府により廃止された。穢多・非人身分の頭領であった浅草弾左衛門の話を変え、説明を受けた。

・黒人差別・男女差別の歴史

アフリカ系アメリカ人活動家であるローザ・パークスの話を交え、説明を受けた。

講義「小さな循環でいい暮らしをしよう」

講師：NPO法人循環生活研究所 理事長 たいら由以子様

・日本の社会が昔のように「循環」を生まない社会となり、環境汚染や健康問題を引き起こしているという事実。それに対して、各家庭で出来る堆肥作りを通じ社会に小さな循環を取り戻そうと活動するNPO法人の取組について説明を受けた。

分野別「フィールドワーク及び海外研修発表」

・mizuトランスコーポレーション 水谷様を招き、各班「第2次研修」「第4次研修」の成果発表を行った。
・各班、研修までに事前にpowerpointを準備する等熱の入った成果発表を行い、好評を得た。

(研修概要 2日目)

2日目は主に、各分野別活動班、各生活班に分かれての活動だった。

地域別実践活動の企画・検討

各班、第6次研修の企画を練り、どのような活動を行うのか検討した。各班、第2次研修や、第3次研修で各々の分野に合った企業や団体を訪問し、多くの学びを得ることができた。これまでに学んだことと関連のある企業の訪問を検討したり、学んだことを活かした活動を計画したり、さらに充実した研修にしていきたいと、各班でアイデアを練って内容を決めた。

報告書の企画・検討

我々の活動の軌跡である報告書の完成に向けて、作業した。写真を選択する際には、写真に写る景色や出会った人々のことを思い出し、懐かしくも感じた。それぞれで、思い

出話に花が開き、笑顔あふれる中、楽しみながら活動することができた。

(感想)

・講義「小さな循環でいい暮らしをしよう」では、身の回りの小さなことに問題意識を持ち、社会問題に取り組むNPO法人の活動に感銘を受け、とても興味が湧いた。
・分野別の発表は各班、完成度が高く、今までの研修を通じ培ったチームワークが発揮された結果だと感じた。これからはグローバル・ウィングで培った人脈は大切にしていきたい。

(3班 富久萌・三角拓也)



循環社会の大切さについて講義 分野別研修の成果について堂々とするNPO法人理事長たいら由以子氏。青年の翼OGでいらっやいます。



みんなで知恵を絞りながら企画を練りました！

講義名	講師
人権・同和研修	竜口 英幸 西日本新聞TNC文化サークル 取締役企画事業部長
「小さな循環でいい暮らしをしよう」	たいら由以子 NPO法人循環生活研究所理事長 (第2回福岡県青年の翼OG)
フィールドワーク及び海外研修発表	海外研修の各訪問先について学んだことを発表(分野班) ※講評：新社会推進部 次長 重松 典子
青年の会 活動紹介	遠矢 隆一郎 青年の会会長(第3回福岡県青年の翼OG)

**第6次研修
地域実践活動**

『ウィンターアクティブ楽習塾』参加

於：福岡県立社会教育総合センター
2016年1月30日(土)、31日(日)

人材育成・教育班

学校だけが学びの場ではない。小学生が自ら進んで活動に参加し、そして成長する姿を見て、こうした環境を整える重要性を実感した。

第2次研修フィールドワークで訪問した「北九州子どもの村小学校」も、海外研修で訪問したタイのチュラロンコン大学付属小学校も、「興味のあることを自ら進んで学ぶ」ための仕掛けが工夫されていた。我々人材育成・教育班は、国内宿泊研修でお世話になった思い出の地、篠栗の社会教育総合センターに再集結し、当センター主催の『ウィンターアクティブ楽習塾』にスタッフとして参加した。この塾は、小学生たちが自ら応募して参加する1泊2日の学校外教育支援事業で、「北九州子どもの村小学校」のプロジェクト同様「学年を縦断した班編成」で活動が行われる。6年生が1年生を助けることで成長していくように、各班およそ10名の小学生を私たち大人がサポートすることは、我々の学びの場でもあると思い参加を決めた。

普段小学生と接することがほとんどない我々は、最初のように接したらいいのかわからなかった。しかし、すぐに子どもたちの方から私たちに駆け寄ってきて、賑やかな活動が始まり、そして2日間があっという間に過ぎた。

下の子を助けてあげようとする高学年や、高学年に負けないようにとおかわりをする低学年は、こうした縦割班の活動でなければ見られないだろう。学校だけを学びの場とするのではなく、本活動のように地域での体験活動の場にもっとたくさん子どもたちが自ら参加したいと思い、地域の大人たちも参加できる環境を整えることが望ましいと感じた。教員を目指している団員は、これまでの活動の経験を活かし活躍してくれて頼もしかった。そしてこうした活動が全く初めての団員も、それぞれが子どもたちから慕われて、新たな自分を発見したようであった。子どもたちと楽しそうに触れ合う姿を見て、このメンバーと研修ができてよかったとしみじみと思った。

私たちは学校という枠組みから放り出され社会に出たら、一気にさまざまな年代の人と関わることになる。今回出会った小学生と20年後と一緒に仕事をするかもしれない。そう考えると、小学生のうちから様々な大人と接して学校や家庭以外の世界を知ることが有意義であると思うし、大人になっても地域の青少年活動に継続して参加することで、例えば若い年代の同僚と関わりやすくなるのではないかなと思う。(報告者 古賀あゆみ)

スケジュール	
1日目	2日目
開塾式 であいのつどい(アイスブレイク) ウィンターアクティブチャレンジ ～室内大運動会～ 夕食 館内ナイトハイク(肝試し) 入浴、就寝	朝食 スキーへGO 閉塾式



がんばれー！
(大運動会の応援)



活動を終わっての一幕



みんなで頑張って
滑りました

**第6次研修
地域実践活動**

『福岡テンジン大学』での講義をプロデュース

於：福岡市赤煉瓦文化館(福岡市中央区天神)
実施日：2016年1月23日(土)

まちづくり班

バンコクと福岡に共通する街の魅力「屋台」。その魅力を発信する講義をプロデュースすることで、班員一人一人の成長を実感。

まちづくり班は、屋台について学ぶ講義『屋台をプロモート。～裏も表も一日密着取材～』を『福岡テンジン大学』と連携して開催。高校生から社会人までの一般の方23名が参加したほか、会場では読売新聞による取材も行われた。

企画背景 **バンコクと福岡に共通する街の魅力「屋台」。その魅力の発信者に**

海外研修でバンコクを視察した際、活気あふれる「屋台」の魅力が福岡と共通していると感じた。狭い店内で隣り合った見知らぬ客同士でも、自然に会話が始まる雰囲気やその佇まいは、バンコクの魅力である「カオス」を彷彿とさせる。しかし屋台を利用する福岡市民の割合は約2割にまで減少しており(注：市民アンケート(福岡市) 2011年より)、その魅力を発信できているとは言い難い状況だ。

そこで我々は、特定非営利活動法人福岡テンジン・ユニバーシティ・ネットワークが運営する、市民参加のまちなか大学「福岡テンジン大学」に対し、『屋台の魅力の発信者育成』をテーマとした講義を企画・提案。同大学コーディネーターの青柳雄太氏と福岡市移動飲食業組合の協力を得て開講することが出来た。

第一部 **福岡の未来に屋台を残したい・・・屋台店主の思いと取り組み**

第一部では、福岡市移動飲食業組合副組合長で、屋台「忠助」店主の白石幸生氏を講師に迎え、団員とのトークセッションを通し、「屋台について学ぶ」講義を実施。街の発展に伴い衛生面や道路占有の問題から福岡の屋台全体が存続の危機に瀕した歴史や、2013年に福岡市屋台基本条例が制定され、市民や街と共生できる屋台を目指していること等について講義が行われた。白石氏は今後について、「50年後も、屋台が生き残っているように、観光客だけでなく、



屋台文化の存続と発展に向けた思いを語る講師の白石さん



講義の中では、企画趣旨の説明の際に、グローバルウィングについての説明も実施した。

地域の方々から屋台はいいね、と思ってもらわなければ」と話した。

その後、店主の一日の生活や、外国人観光客の来店状況などについて活発な質疑応答が行われ、最後に『屋台検定』(西日本鉄道㈱の協力で作成)を解いてもらい、解答を団員が解説した。

第二部 **参加者から「屋台に行きやすくなった」。続編を望む声も**

第二部では、各グループで「屋台の魅力を紹介するショートムービー」を作成するため、屋台を訪問し取材を行う予定だったが、折からの積雪により屋台が休業となり、映像構成の設計図である「絵コンテ」の作成・発表までを行い、各々が考える屋台の魅力の伝え方を発表した。「屋台の持つ温かみ」や、「お酒を飲まない人でも楽しめること」などに注目した発表の他に、「女性や学生でも入りやすく、分かりやすい空間やメニューづくりを」等の提案も寄せられ、盛況のうちに終了した。

参加者からは「自分から屋台に行くのは尻込みしていたが、今回の講義のおかげで屋台に対するハードルが大分下がった。」「次回もぜひ開催してほしい」など好評の声が寄せられた。

講義のプロデュースを終えて

屋台取材こそ敢行できなかったが、屋台という福岡の魅力を発信するきっかけづくりを行うことができたと思う。また我々団員も、今回の講義の企画・運営を通じて、魅力の発信者として一人一人の成長を実感できた。

最後に、今回の企画・運営にあたり協力を頂いた「福岡テンジン大学」様及び「福岡市移動飲食業組合」様に厚く御礼を申し上げます。(まちづくり班)



屋台の魅力を発信していくぞ！

第6次研修
地域実践活動

「耕作放棄地を活用した地域活性化事業」
の現場訪問 於：福岡県糸島市 2016年1月10日(日)

産業政策班

耕作放棄地を有効活用するために薬用植物が栽培されている現場を訪れ、農業の活性化に取り組んだ。

私たち産業政策班は、福岡市が行う「耕作放棄地を活用した地域活性化事業」に参画している新日本製薬株式会社の長根様にご協力頂いて、薬用植物が栽培されている耕作放棄地の現場を訪れた。今後注目される可能性の高い「菊芋(キクイモ)」と「甘草(カンゾウ)」の収穫作業を体験し、自分で調理して食べることで、耕作放棄地の有効活用を通じた農業の活性化に取り組んだ。

まず訪れたのは菊芋が栽培されている耕作放棄地。キク科ヒマワリ属の多年草である菊芋は、血糖値上昇を抑制する作用を持ち、天然のインスリンと呼ばれている。繁殖力がとても強く、ほとんど手間のかからない植物であるため、耕作放棄地でも十分栽培することができるそうだ。今後は食材・健康食品として取り扱いやすい様に品種改良を行い、地域の特産品としてブランド化を目指すことで、福岡の農業活性化支援へつなげたいとのことだった。

次に甘草が栽培されている耕作放棄地へ。マメ科カンゾウ属の多年草である甘草は、解毒作用のあるグリチルリチンが含まれ、市販薬の約70%に使用されている非常に重要な薬用植物である。また、砂糖の約50倍の甘みがあり、お菓子や醤油、甘味料などにも幅広く使用されている。実際に根を齧ってみると非常に強い甘みを感じ、それが数十秒間も続いて驚いた。

日本で使用されている甘草の多くは、中国など海外からの輸入に頼っているが、近年は世界中で需要が急増しており、通常は5年以上の月日をかけて栽培して収穫するため生産量が限られており、資源の枯渇が懸念されている。新日本製薬株式会社は、長年の研究の結果、約2年で収穫できる栽培方法に成功しているそうだ。

甘草も栽培に比較的手間がかからないことに加えて、あえて過酷な環境下で栽培して栄養価を高めるため、耕作放棄地での栽培に適しているといえる。

最後に、長根様から、「収穫した菊芋と甘草を持ち帰って、新しい料理方法を考えて欲しい」との宿題を頂いた。



「菊芋」が栽培されている耕作放棄地

菊芋は、生でも食べられるので細切りサラダや野菜ジュース、揚げ物やスープの具材としたところ、味にクセが無くシャキシャキとした歯ごたえが有り非常に美味しく食べることができた。食物繊維を多く含むため便秘改善にも効果が有るとのこと、普通の食材や給食、ダイエット食、そして糖尿病患者の方へ提供する病院食など幅広い料理で使用できる可能性を感じた。

甘草は、乾燥させてお湯で煮出し、煎茶とブレンドして飲んだところ、程よい甘さを感じてとても飲みやすく、毎日飲んでも飽きが来ない味だった。

耕作放棄地は、近年の農業従事者の減少や農業人口の高齢化などが原因で増加し続けている。私たちにできることは、こうした現状を知り、それを食い止めるために努力している企業や行政の姿を周囲に伝えること、そして栽培されている薬用植物の効果や有効性を理解し、食材として積極的に活用することで需要を喚起することだと思った。

福岡の農業活性化のための一つの方策は、耕作放棄地で菊芋や甘草といった薬用植物を栽培してそれをブランド化し、効能と食べ方を積極的にPRして一般消費者に受け入れてもらい、販売量と生産量を増やしていくことだと学んだ。

(報告者 大原未流斗・渡辺将太)



「菊芋」の収穫作業の様子



寒い中頑張って収穫しました！



- 1 班
- 今村 小雪
 - 大原未流斗
 - 鯉川 聡
 - 溜島 萌
 - 早戸 純一
 - 原田祥太郎
 - 簗原あおい
 - 渡辺 将太

- 2 班
- 市木 優貴
 - 井上 侑希
 - 大野 香織
 - 勝谷 崇寛
 - 古賀あゆみ
 - 能塚 靖裕
 - 福岡 静
 - 横尾 春菜

- 3 班
- 東 宏輔
 - 安部日向子
 - 糸数 基樹
 - 緒方 亮介
 - 甲斐紗由美
 - 富久 萌
 - 三角 拓也

団 員
レポ ー ト



Global Wings



We build our DREAM

今村 小雪
西南学院大学 経済学部2年

Global Wings **1** 班

私が今回グローバル・ウイングに参加しようと考えたきっかけは、同じ大学や友達といった私が日常関わっている狭い範囲ではなく、福岡県内各地のより広い範囲で、学業や仕事など様々な分野で何かに全力で取り組んでいる方々と出会いたいと思っていたからでした。さらに、私は今年の2月にフィリピンで海外ボランティアに参加したことがきっかけで、日本と同じアジアに属する他の国々に強い興味を抱き、今回の訪問先であるタイとミャンマーを、ボランティアや旅行とは違う視点から見てみたいと思ったことも、参加を決意した理由の1つです。

国内で実施したフィールドワークでは、アジアの中でも早くに発展を遂げた都市だと言える福岡市の現状や課題について、今まで興味を持ったことがなかった渋滞緩和や都市計画といった分野について知ることができました。事前研修中の講義では、福岡在住の外国の方から私たちとは違う海外からみた福岡について知ることができ、さらにタイとミャンマー両国の発展を支援されている日本人の方から、両国の現情や苦労についてお話を伺うことができました。私はボランティアなどを通して海外で生活している方と交流するときに、必ず心に決めていることがあります。それは「日本人の誇りを持った国際人である」ということです。相手の文化などを受け入れると共に、日本人としての振る舞いや文化を伝えることを忘れずに行動しようとしています。今回の研修で私たちに講義して下さった講師の皆さんは、まさに私の理想としている「日本人の誇りを持った国際人」と呼べる方ばかりでした。これからさらにグローバル化が進行していく中で、私もこうした講師の皆さんのような国際人になりたいと改めて思いました。

第4次研修の海外研修で1番印象に残っていることは、OISCAミャンマー研修センター訪問です。OISCAの研修センターがあるパコック県エサジョ地区は、OISCAの20年近い支援とミャンマーの方々の努力により、草木がほとんど無かった痩せた土地が、農業で自活できる土地に生まれ変わりつつある場所でした。そのような場所で、日本人の技術指導者が現地の方々と寝食を共にし、全身全霊でミャンマーの発展のために取り組んでいる姿に、私はとても心奪われ、これが本当の国際交流の姿であると強く実感しました。

最後に、一緒に参加した団員の方々とのお会いはとても刺激的でした。今まで自分の将来について明るい考えを持つことができませんでした。しかし今回の研修で、夢に向かって学業に励む大学生や自分の仕事に誇りを持った社会人と共に過ごしていくなかで、私も将来のために頑張れることがまだまだたくさんあり、私も社会人になったときに自分の使命を全うし、次の世代にも新たな一歩を踏み出すきっかけを与えることの出来る人材になりたいと思いました。



“福岡とアジアを繋げる青年リーダー”として、地域貢献に尽力したい

大原 未流斗
株式会社福岡銀行

Global Wings **1** 班

今回グローバルウイングに参加した理由は、私自身体験したことのない海外の文化・価値観に触れることで視野を広げたいと思ったからです。

正直に言えば、ミャンマーとタイには暗い発展途上国のイメージを抱いていました。しかし実際に現地を訪れてみると、若者たちのエネルギーと街中の熱気をひしひしと肌で感じました。

まずは、訪問した両国の都会(ミャンマー：ヤンゴン、タイ：バンコク)と地方(ミャンマー：バガン・パコック)の違いの大きさに驚きました。例えば都会では高級車が多く走っており、建物の大きさを見ると目覚ましいアジアの発展を感じることが出来ました。地方では昔からの伝統が深く残っており歴史を感じることが出来ました。

こうした違いを目の当たりにして、私は「経済発展によってこの地方に住む人々がまだまだ豊かになる余地があるのではないかと」ふと考えました。

しかし、研修を続けていく中で「はたして国が経済発展し、生活が豊かになることが本当の幸せに繋がるのか?」という疑問が湧いてきました。

多くの日本人は豊かさやより良い生活を求めて、良い車・大きな家・携帯電話等を手に入れようとします。私もそうでした。そのために休みなく働く人々も多いですが、それが必ずしも幸せに繋がっているわけではありません。ミャンマーのオイスカ研修センターやチャウカー村を訪れて交流した現地の方々は、貧しいがゆえに夢のために目を輝かせ毎日を楽しそうに充実した生活をしており、私自身の考え方が大きく変わりました。日本の青年にはないハングリー精神を持っている両国の青年にも多く出会っていました。私たちがアジアの若者が持っているハングリー精神を見習い、今よりももっと福岡が良い街になるように精進しなければと感じさせられました。

今回の研修では躍動するアジアを肌で触れ、青年のエネルギーを体全体で感じる事ができ、大変有意義なものになりました。近い将来、「福岡とアジアを繋げる青年リーダー」となれるよう、地域貢献に尽力していきたいです。



遙か未来を見据えるミャンマーと“町の魅力づくり先進地”バンコク

鯉川 聡
福岡商工会議所

Global Wings **1** 班

ミャンマーとタイ両国への訪問中、自分自身の価値観を問われる機会が数多くあった。ミャンマー／牛や手作業で農作業を行なう、OISCA農業研修センターや周辺の農村部。ここに日本の農業機械を売り込み、生産性を向上させ、現地の生活をより豊かにできるのでは・・・と一度は考えた。しかし購入費や燃料代をペイするための収入や、住民の仕事の確保をどうするのか。何よりも今の生活に対して現地の方々が「不便や不幸」を感じているとは思わず、通りすがりの方々に会釈すれば、言葉は通じずとも自分の何倍もの笑顔で挨拶を返してくれた。

同国には「輪廻転生」という、今や自分の将来の幸せの為ではなく、来世でよい自分になれるよう働くという価値観があると言う。日本人の「今頑張れば、自分の将来が豊かになる」という考えは恐らく通じない。むしろミャンマーの方々は日本人が目指すよりも遙か未来を見据えて、日々の生活を送っているように感じられた。

仏教の聖地「バガン」で、1000年近くの間、様々な侵略を乗り越え、世界遺産ではなく、これからも信仰の場であることを選んだ数多のバゴダ群を見て、この国の優しくも筋の通った国民性を感じた。

タイ／まちづくりについて熟考されることなく発展が進み、ようやく公共交通の整備が本格化しつつあるバンコク。毎晩歩道に露店が立ち並び、様々なローカルフードや少々怪しげな土産品が売られている様子は、市民や消費者の「安全安心・保護」に重きを置き、幾層にもルールを定めた日本の法制度や街づくりからは想像できない光景だ。

しかし個人的には「都市計画後進地」と思えるこの街は、今年の海外からの渡航者想定が1,824万人と、世界ランキングではロンドンに次ぐ第2位に位置するほどの魅力を持っている。

上述の露店も見方を変えれば、企業や市民が自由に商いの才能を発揮できる場がある証であり、街に人々を惹きつけ、引いては街や国の活力に結び付いているように感じられる。街の魅力づくりの観点では、むしろ日本よりも「先進地」ではなかるうか。今後の福岡の行方を考える上で大いに参考にしたい。

今回の訪問では、西垣様やOISCAの皆様を始め、数多くの方々のおかげで新たな価値観に出会えた。心から感謝申し上げたい。蛇足だが、両国から帰国後、家族で牡蠣を食べて私だけ当たらなかった。鍛えられたのは、考え方や精神だけでなく、胃腸もだったことを特筆したい。



恥ずかしがらずに自分を表現できる、そんな子どもを育てる教育の必要性

溜島 萌
福岡教育大学教育学部4年

Global Wings **1** 班

私は現在大学4年生で、来年から福岡県内で中学校の教員になります。今年の5月に宗像国際環境100人会議に参加し、世界中の異なる環境で暮らしている人々と自然環境について語り合ったことで、来春から社会人になる前に自分の目で海外を、世界を見てみたいという思いが強くなり、グローバル・ウイング2015に応募しました。このプログラムは、9月の第1次研修から年明け1月の第6次研修、そして3月の報告会まで約半年に渡る研修内容が充実しており、とても有意義な時間を過ごすことができました。分野別班分けでは「人材育成・教育班」の一員として参加し、プログラムを通じて日本・ミャンマー・タイそれぞれの学校を訪問し、多くのことを学びました。

9月末に実施した第2次研修(自主企画フィールドワーク)では北九州にある「北九州子どもの村小学校」を訪問し、今まで学校に対して持っていた既成概念が覆されました。この学園ではプロジェクトという体験活動を基盤に学校生活が成り立っており、様々な方法で児童・生徒が一人ひとり自分を表現していました。

11月に実施した7泊8日の第4次研修(海外研修)では、ミャンマーとタイそれぞれの小学校を訪れました。ミャンマーのマグウェイ管区パコック県にあるチャウカー村の小さな小学校では、校門の近くに男女分かれて腕組をして並んでいる姿が印象的でした。ミャンマーにおいて腕を組む姿勢は目上の人に対する敬意を表す姿で、文化の違いを感じた瞬間でした。その後の小学生との交流時間は折り紙で紙飛行機を作り、日本の文化をほんの少しですが伝えられたと思います。

タイではチュラロンコン大学附属小学校という、日本でいえば東京大学の附属小学校で、とても設備の充実した大きな小学校を訪問しました。英語の授業を参観させていただきましたが、児童参加型の授業で児童が英語を多く話すことを意識した授業でした。先生は児童が恥ずかしがらないように段階的に授業を組み立てており、子どもたちが生き生きとしていました。また、この学校の卒業生は「考えること・すること・表現することを恐れない」と先生がおっしゃっていました。これらは日本の子どもたちにとってまだまだ不十分なことです。日本の子どもたちも恥ずかしがらずに自分を表現し、積極的に行動できるように教育していく必要があると思います。

こうした学校訪問以外にも様々な場所を訪問し、たくさんの人と出会い、色々なものを見て、様々な経験をし、とても充実した時間を過ごすことができました。

冒頭にも述べましたが、私は来春から中学校の教員になります。研修で講義を頂いたヤンゴン在住のジェイサットコンサルティング代表取締役の西垣充さんがおっしゃっていたように、この経験で自分が見たものを生徒に伝え、海外に、世界に興味をもった生徒を一人でも多く育てていきたいです。



グローバル・ウイングを通じて経験して学んだことを 職場や次世代に繋いでいきたい

早戸 純一
添田町役場教育委員会

Global Wings 1 班

今回グローバル・ウイング2015参加にあたり、自分を参加させてくれた勤務先、研修中にお世話になった多くの関係者の方々に感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

第4次研修(海外研修)で最初に訪れたミャンマーでは、都心部と農村部の違いを強く感じました。都心部は高層ビルや建設途中のものもあり、ミャンマーの勢いを感じる事が出来ました。逆に農村部はインフラ整備も整っていない所もあり、質素な暮らしをしていて、都心部とは真逆の生活背景を見ることが出来ました。ここまでの差を見て本当にビックリしました。ただその中でも多くの人の目は輝いており、苦しさなどを一切感じる事が出来なかった事にも驚きました。また海外研修初日には選挙が行われており国民の政治への意識が高く、この選挙を機に5年10年で大きく変わっていくのではと思いました。また研修途中で寄ったシュエサンドーパゴダから見る景色は、今後一生忘れる事のできない素晴らしい景色でした。

二カ国目のタイでは、交通渋滞がすごいと聞いていましたが、空港からホテルまでの道のりで、渋滞の凄さを身をもって体験し、企業訪問では、その渋滞緩和に関する話や、対策としてBTS(スカイトレイン)の増線等の話を伺い、国が抱える問題は様々である事が分かりました。

チュラロンコン付属小学校訪問では、子どもの興味のあることは、育成が早いという事からそれを伸ばしていく教育を小中高と継続して行っており、地域から様々な講師を招へいしたり、その他の大学なども連携しており、日本の教育とは違い子どもが率先して勉強を出来るような取組を行っており、現地に行きたくてしか得ることのできない様々な経験を積むことが出来ました。

そして様々な職種の方や大学生といった普段では関わる事のない、個性的な団員との交流もいい刺激になり、仕事の話や学業の話が出来た事も良かったです。

今回のグローバル・ウイングの研修を通し、自分の知らない世界がまだ多くあり、自分自身多くの事を学ぶ事が出来ました。そして今後、機会があれば世界のいろいろな国を少しずつでもいっているので、自分の目で見て回りたいという新たな目標も出来ました。また研修中に言われた、「色々な視野を持ち、様々な切り口で物事を見る」ということを胸に、今後これらの経験を職場や次世代に繋ぎ選んでいけたらと思います。



喜悦

原田 祥太郎
久留米大学 文学部 1年

Global Wings 1 班

私がこの事業に参加した理由は今置かれている自分を変えるきっかけをつくりたかった、そんな思いで参加を決意した。研修期間において学生の間でもきくことができない講師の方の講演は1日中聞いていても飽きることもなくとても味が深い内容ばかりだった。特に1次研修の占部先生の話は内容が濃かった。海外に出発するまで戦後70年であり日本人墓地で供養以外目的が思い浮かばなかった。正直、心の底から楽しむことなく厳粛な形で1週間が過ぎると考えていた。しかしその考え方はもろく崩れ去った。

ミャンマーに着いた初日からこの国違う。五感をすべて駆使しても日本にはないものがある。TVで見る風景と違う。匂いが違う。気候が違う。当然ながら日本と違うのは承知済みだが、でも来た者だけにしかない体験に不思議と欲が湧いていた。この国にいる人を見たい。そんな一言で2日目のオイスカと村の小学校の視察へといった。ミャンマー人は日本人以上に内気な感じにみえた。だが、それは序盤だけでありむしろ誘い出す感じが欧米人と変わらないくらい攻撃的で自分自身がつかれた。オイスカで同世代の若者との交流で恋について聞くとこれは万国共通の話題である、と感心した。政治が勝手に国境をきめるのであり、極論人が人であるならば、民族の違いでどうして争わなければならないのか。不思議でたまらなかった。仏教遺跡を視察したとき初めて石に祈りを表す姿を見て大概木に祈りを表す日本人とはお釈迦様がルーツであるのにも関わらず、存外文化の違いをみせつけられた。

他にも農業体験や市場、タイでの先進的な都市づくりをみてまだまだ日本には及ばないといわれる部分があるが逆に日本が学ぶべき点が多いと感じた。今現在帰国してからよみがえる情景はミャンマー、タイの子供たちがはしゃぎまわる姿であり日本の子供たちとは何ら変わらない。かわるのは政治だけであり、人の往来も変わることがない。それを衝撃だと感じる私がやれることは今何もない。しかしながら、将来持続的に安定した社会を提供し続けることは難しいがそれを目指すのが私の使命でないかと帰国して感じるようになった。

最後に、海外で病気にかかり、班のリーダーでありながら他の団員の仲間や事務局の方々に助けをもらいこうして報告書が書けることが人生の賜物であるとおもいます。

ありがとうございました。



“未来のため”に学ぶ ミャンマーの青年たちとの出会い

蓑原 あおい
福岡県立大学人間社会学部2年

Global Wings 1 班

私は、日本を飛び出し成長著しいアジアを自らで感じることで、自身の将来の展望を見直すきっかけにしたい、と思いこの研修に参加しました。将来こうなりたい、という像はありながらも毎日なんとなく時間が過ぎていけばかりで、「何か行動を起こさなきゃ!」そう思っていた時に出会ったのがこのグローバルウイングでした。海外研修までを終えた今、この研修に参加できたことを心より誇りに思います。

今回の海外研修はミャンマーとタイの2か国。アジア圏の国に行くことが初めてであった私にとっては、目に映るもの全てが新鮮で驚きの連続でした。現地の方々の生活の中に普通に点在している遺跡の数々、テレビでしか見たことのなかった見慣れないものがたくさん並びミャンマーのマーケット、運転の粗さに少しひやひやしてしまうタイの交通状況、すべてが今でも目に焼き付いて離れません。そして何より、今まさに大きな発展を遂げようとしているミャンマーとタイ。この2か国の同年代の方々と交流できたことは私にとって大きな刺激となりました。海外研修2日目に訪れたミャンマー・パコックのOISCA農業研修センター。ここでは各地から農業の技術を学ぶために若者が集まり、共同生活を行っていました。「自分の村に帰ってここで学んだ農業の技術を伝えたい。」志高くそう語る同年代の研修生を相手に、私はただただ圧倒されるばかりでした。“自分のため”に学ぶのではなく、“未来のため”に学ぶその姿勢に、学生としての自分の今後のあり方を改めて考えさせられました。

また、このグローバルウイングの最大の魅力は人との出会いです。国内研修で講義をいただいた講師の皆様、海外研修でお世話になった訪問先の皆様、タイ・バンコクでの夕食会にご参加いただいた皆様、今回の研修で出会ったすべての皆様に心から感謝の気持ちを伝えたいです。本当にありがとうございました。そしてグローバルウイング2015の団員と出会えたことも私にとって大きな“学び”でした。魅力あふれるメンバーと共に9月から今までの国内・国外における研修を乗り越えてきたことはかけがえのない宝物です。この研修に参加させてくれた両親にも心から感謝します。今回の経験を糧に、大好きな福岡に恩返しができるよう精進していきたいと思えます。



日本は自分たち一人ひとりが創っていくという気持ちを 常に持って行動したい

渡辺 将太
学校法人中村学園事業部

Global Wings 1 班

今まさに進歩しようとしている国へ足を踏み入れることができ、私はとても感動しました。海外に行ってみようという漠然とした気持ちは以前からありましたが、今回のグローバル・ウイング2015は日本を飛び出さない限り感じる事の出来ない興奮と感動の連続でした。

まず初めに訪問した国はミャンマーです。主要産業は農業ですが、中央部は乾燥地帯であり比較的農作物が育ちにくい環境でありながら、公益財団法人オイスカの日本人技術指導者や現地の方々の努力により、土地の性質に見合った作物を中心に栽培することで生産量を伸ばしており、今後、灌漑やインフラ整備や機械の導入により更なる発展が期待されています。そこには技術を教える日本人の方々と、ミャンマーの将来を見据え規律正しい環境に身を投げ学ば現地の方々のとても強い思いが感じられ、まさにこれからのミャンマーを引っ張って行く人物像がそこにはありました。この国は国民全員が政治に強い関心を持つ国で投票率は約8割に上ります。国民1人ひとりが国を考え創造し、自然エネルギーや観光要素も含め非常に高いポテンシャルを持った国だと感じました。

また、ミャンマーの旅での最終日に日本人墓地を訪問したのですが、とても綺麗に管理されており、戦後70年という大きな節目にこの地を訪れることができ、とても感慨深い気持ちになり、日本より遠く離れたこの地で眠る方々へ団員一同、心からの祈りを捧げてきました。

次に訪れた国はタイ王国です。首都バンコクに到着してまず思ったことは交通渋滞の酷さです。平日の夕方、まさに帰宅ラッシュ時にバスで移動していた私たちは街中の道路で約40分間殆ど動くことができませんでした。その後少し動いては止まりの繰り返しでした。交通インフラ整備はまだ課題が残っており、原因として歴史的な背景や自動車販売数の増加、都市面積に占める道路面積の割合が極端に低いことが挙げられます。

しかし一方で、渋滞を解決するための道路工事も目立ち、都市中心部にはBTS(スカイトレイン)とMRT(地下鉄)も整備されていました。今後はBTSとMRTの延伸工事、新路線の開通を進めていくようです。そのうえBRT(バスの専用ルート)の整備や水上バスを有効的に使用する試みもされており、これらが実現すれば交通渋滞も緩和されていくと思えます。

また、私たちが訪問させて頂いたチュラロンコン大学付属小学校では小学生低学年の英語の授業を見学させて頂きました。授業内容はすべて英語、ほぼ全員の生徒が筆記体で文字を書いていた。生徒たちが積極的に発言しとても自由な授業ですが、授業の目標内容は明確に定まっているように見え、問題に正解すると鉛玉が貰えるといった生徒たちの自主性を育てる授業でもありました。

最後に、この半年にわたるグローバル・ウイング2015で学んだことは、日本を飛び出し世界の一部に触れ知識が増えたこと、世界の方々とコミュニケーションが出来る語学力の大切さ、自分の得意なことを勉強し探究する気持ちです。また、広い視野を持って物事を捉えるという意味が私の中で少し変わったような気がします。この経験を今後の人生に活かし、日本は自分たち一人ひとりが創っていくという気持ちを常に持って行動します。高い目標を持った団員の仲間達たちと出会えたこと、グローバル・ウイング2015に尽力して頂いている関係者の方々に本当に感謝しています。



ポジティブメンタルアティテュード

市木 優貴

みやこ町役場教育委員会

Global Wings **2** 班

ポジティブメンタルアティテュードとは積極的心構えと訳す。私が好きな言葉である。視察研修で印象強く私の心に刻まれた経験は、ミャンマー OISCA研修センターでの研修、タイバンコクでの企業視察研修、福岡とゆかりのある方々との夕食交流会である。

OISCA研修センターの研修生、指導員はとにかく積極的で熱く、親切で笑顔だった。農業体験で経験した養豚作業は、豚小屋の掃除、餌やり、子豚への注射等、日本では絶対経験しないことばかり。指導してくれた指導員ミョーさんの笑顔が忘れられない。ミョーさんは将来、養豚業を自らの村で普及させ村の為に役立てたいと笑顔で話していた。同じ質問を研修生にすると、答えは同じ。日本より、物質的には豊かではないけれど、ミャンマー人の精神は日本人以上に豊かだと感じた。農業体験は自らの価値観を変える契機となった。

次に、タイバンコクでTEAMGROUPCOMPANIESという企業を視察。この企業はタイのコンサルティング会社で、彼らの関わるバンコクの交通事情を改善させるプロジェクトのプレゼンテーションを聞き、交通渋滞は深刻であり、難しい問題だと感じた。政府に様々な施策を提案し、交通渋滞問題を緩和させようとしているTEAMGROUPCOMPANIESの動きには、目を見張るものがあった。

さらに、バンコクでの福岡県人会や現地に進出する福岡県企業の駐在員、現地の大学生や福岡にゆかりのある方々との夕食交流会は大変有意義だった。私はその中で、英語でウェルカムスピーチを2分間行った。貴重な経験でまた一つ私自身の経験値が増した。

今回の約半年に渡る「福岡県青年の翼」研修に参加して、今ははっきり言えること。それは私に自信がついたことである。さらに積極的心構えで物事に臨むことができるようになった。私は行政職員として働いている。誰かの為に働くこと。決して忘れてはならない奉仕の心である。公務員として世の為人の為に何が出来るか。研修後、毎日少しだけ考えるトレーニングを私は続けている。決して自分を過信せず、経験を活かし、率先垂範、ポジティブメンタルアティテュード(積極的心構え)を実践していく。海外視察研修では、多くの経験、学びを得て、躍動するアジアを直に体験することができて良かった。研修で講義を頂いた講師の方々や関わってくださった皆様、大変ありがとうございました。



将来は“日本の自慢できるもの”を海外に展開していく職業に携わりたい

井上 侑希

福岡女学院大学国際キャリア学部1年

Global Wings **2** 班

グローバルウィングという事業について知ったのは、私が入学して間もない頃、昨年のグローバルウィング2014に参加した同僚の先輩の体験談を聞いたときだった。先輩は、多くの研修や普段触れ合うことのない社会人の方々との交流を通して貴重な経験を積み重ね、自分自身の成長に大きくつながったとおっしゃっていた。そこで、私もこの研修に参加し、研修を受けることで何か得られるものがあるのではないかと考え、学科の教授や昨年参加した先輩に支えられてこの事業に参加する機会を得ることができた。

この事業のメインである海外研修に向かう前に、県内でいくつかの研修を行った。第1次研修では各界で活躍されている多くの講師の方々に来ていただき貴重な講演を聴くことができた。講演を聴いていく中で、社会人の先輩方や他大学の学生は今までに自分が考えたこともないような視点で質問をしたり考えたりしていて、初めて交流する社員の方々との出会いは本当に刺激的だった。第2次研修では、産業政策班としての活動で、私は、福岡農産物通商を訪問した。日本のすばらしい農産物を海外に輸出している会社で、輸出のノウハウや近年の日本の農産物輸出の傾向など貴重なお話を聴くことができた。私自身、将来は日本の良いもの、文化的なもの、伝統的なものからサブカルチャーまで“日本の自慢できるもの”を海外に展開していくような輸出部門に携わる仕事に就きたいと考えていたので、この訪問は非常に充実したものになった。第3次研修では間近に迫る海外研修を前に社員が一致団結して準備を進めた。現地の企業訪問や夕食会で使用するスピーチの英語原稿を考えたり訪問先企業での質問事項を詰めたりで、いよいよ海外研修が始まるのだという期待感が非常に大きかった。

海外研修では“飛躍的に発展し続けるアジア”の中でも最後のフロンティアといわれ近年経済活動が活発になってきているミャンマーと、アジアの中でも大きな成長を続けているタイの二カ国を訪問した。現地では多くの訪問先を訪れ、多くの方々や交流した。その中でも特に印象に残っているのは、タイ・バンコクでの夕食交流会と、ミャンマー・ヤンゴンでの夕食会の2つだ。バンコクでは、福岡県人会の方や現地の方といった、普段自分が関わる機会が少ない方々と交流しお話をすることができた。ミャンマーでは JICA でミャンマーのケシ栽培撲滅活動を行っている吉田さんにお話を聞いた。撲滅に対する強い思いや現地で活動していく中での刺激的な体験などについて聴くことができ、非常に感動した。現地では、日本ではできない経験を多く積み重ねることができ、それぞれの訪問先で社員たちを快く歓迎してくれたことに感動した。訪問先のすべてで、貴重な財産となるようなお話を聞けたり、体験できたり、自分の成長につながったと感じている。同行した社会人の先輩方や他大学の仲間との出会いも将来の糧になるようなものだったと感じている。今回の研修をこれだけで終わらせず、今後の福岡県の発展や自分の将来に向けて活かして行きたい。



現状を知ること未来の問題解決をする

大野 香織

北九州市立大学法学部1年

Global Wings **2** 班

今回のグローバルウィング2015における研修は大変有意義なものとなりました。一次研修から、田中藍株式会社の田中常務など、アジアに目を向け海外進出している企業のトップの方々などから普段聞くことのできない貴重な講義をいただき、より広い視野を持って現地での研修を行うことができました。まずは自分たちの国、日本を知ることがグローバル化していく社会では重要なのだと再認識させられました。

タイ、ミャンマーの両国を訪問した海外研修では一日目から目に飛び込んでくる光景が日本で見る日常とはかけ離れていて、すべてのことが新鮮に思われました。

まず、オイスカ研修センターで見た農業の様子です。日本とは違う土壌、気候であるにも関わらず日本の米を栽培していること、他にも多くの種類の作物を有機栽培しており、家畜の世話も普段目にしない大胆な方法で行っていて衝撃を受けました。ミャンマーを訪問した日が歴史的な総選挙の日だったこともあり、空港の一部で政治に熱く声を上げる人たちがいました。ただ、それ以外の場所では、日本ではあまり報道されないミャンマーの普段と変わらない平穏な日常をうかがうことができました。

タイのチュラロンコン大学付属小学校の視察では、新しい理念での教育現場を目にすることができ、子どもたちの興味関心を最大限に活かした教育への関心が強まりました。また、バンコクでの夕食交流会はたくさんの方々の企業の方、現地の学生たちのお話を聞くことでグローバル社会の中で生きるこれからのことを深く考えることができ、現地の方の声を一番聞けた機会だったと思います。タイの交通渋滞も実際に体験し、毎日この状態が続いているという現状を知り、自動車以外の交通機関の一日も早い普及の必要性を感じることもできました。

他にも二ヶ国を通して多くの歴史的建造物や伝統的産業の視察をすることができ、日本とはまた違った課題があることも認識しました。幸せの基準が異なれば日本の最新技術を導入したからといってミャンマーの方々の生活が充実し幸せをもたらすとは限らない、日本の作物販売についても空輸のコストが今後の課題であるということです。これらの課題を福岡と協力しながら連携して改善を図りたいと思います。

今回の研修を通して、タイ・ミャンマーについて多くのことを学ぶことができました。この経験を自分のためにももちろんのこと、今後の福岡県全体に関連させて福岡県発展のために積極的な活動を行ってまいります。



志を高く持って、これからも様々な体験をして、それを社会に還元したい

勝谷 崇寛

九鉄工業株式会社北九州支店

Global Wings **2** 班

グローバル・ウィング2015に参加させていただき、非常に貴重な経験をさせていただきました。飛躍的に発展を続けるアジアの現状を肌で感じ、グローバルな視野を持ったリーダーの育成が目的の国内・海外合わせて約半年にも渡る研修で、今年の海外研修ではミャンマーとタイを訪問しました。

ライフラインや交通網を整えるなど飛躍的成長を続け、先進国に追いつき追いつくやうな勢いを感じるとともに、地方と都市に大きな格差があり、貧富の差も激しい中で、物が豊富であることが必ずしも幸福につながっていないと感じました。ミャンマーではパコックのOISCA研修センター、タイのバンコクではチュラロンコン大学付属小学校を訪問したり、夕食交流会で福岡県人会や福岡県とゆかりのある方々と交流したりすることができ、新しい価値観などにたくさん触れることができ、視野が一気に広がったように思います。今回の研修でお世話になった皆様、お忙しい中、企業訪問をさせて頂いたり、懇親会に参加して下さったりと私たちのために貴重な時間を割いて頂きありがとうございました。

以上のように、このグローバル・ウィング2015は、自分の今後の人生にとって非常に価値のある有意義な研修になりました。特に印象に残っていることは、海外研修で訪れたミャンマー・パコックのOISCA研修センターとチュラロンコン大学付属小学校です。OISCA研修センターでは、養豚場の清掃や生まれて数日の子豚に免疫注射をするなど日頃経験することのない養豚作業をさせて頂いたり、農業を真摯に学ぶ若者たちと交流したりすることで、私自身も志を高く持ってこれからも様々な体験をして、それを社会に還元していこうと思いました。

タイ・バンコクのチュラロンコン大学付属小学校の訪問では、実際に授業を参観させていただき、興味を持ったことを伸ばすカリキュラムであったり、失敗を怖がらずに様々なことに積極的に挑戦させる授業であったりと一般的な日本の学校教育とは違う教育を行っていました。

そして最後に、このグローバル・ウィング2015では、学生や社会人といった様々な年代や業種の団員の皆との交流もとても意義のあるものだったと思います。学習意欲が高く、積極的な皆との研修は自分にとって学ばせてもらうことが多くありました。この研修で学び感じたことを、今後の仕事や活動などで活かして行き、何か小さいことでもいいので社会に貢献していけたらと思います。



福岡県人として生きる

古賀 あゆみ
福岡市役所

Global Wings **2** 班

なぜ私は日本人として生まれたのか、そして福岡に生まれたのか。そんなことを考えずにはいられない旅になった。今回訪問した2か国は仏教徒が大多数を占める国。日本とは違う金色の鮮やかな寺で、来世のために生きるミャンマー人・国王のために祈るタイ人を目の当たりにし、日本人は何を信じて生きているのだろうと感じた。

渡航先で観光でない体験ができる点が本事業の魅力である。印象に残っているのは現地ですべての日本人の方のお話を他の団員と一緒に聞いたことだ。ミャンマーで過ごす最後の夜、現地で活躍されている3名の日本人の方々を囲んだ夕食会のこと。「村長は『他国からの援助でインフラができれば、次は使いこなせる人がほしい』と話していた」というお話から、大切なはこの国でも教育であり、人づくりなのだと感じた。また、タイでの交流会のこと。海外で仕事をするのは憧れだったが、仕事で来ている方は「サケが生まれた川に帰るように最終的には福岡に帰りたいたい」と思っていた。海外に飛び出しきれなかった自分を残念に思うときもあるが、私も生まれ育った福岡が好きだ。ミャンマーで戦死した同郷の方がたくさんいらっしゃることに、タイのガイドさんが行ってみたい篠栗の寝姿の涅槃像のことなど、もっと福岡や日本のことを知らなければならぬと思うと同時に、どうして私は他の国でなく日本に、この時代に生まれたのか、どう生きていくのか改めて考えるようになった。

海外に行く前に研修があり、現地で感動を他の団員と共有した後、帰ってきてからも研修がある点も本事業の魅力である。ひとり旅をする方が楽しかった時期もあったが、仲間がいた方が面白い。本事業を通じていつもと違う仲間に出会えて刺激的だった。

応募するにあたり、推薦書がネックで実は1度諦めた。それでも諦めきれず、ギリギリにお願いしたにも関わらず書いてくれた方がいて、帰ってきたら「ミャンマーの選挙ニュース見てたよ」と言ってくれる人がいて、休みをもらうことで気付けたこともあった。事前研修を含め、参加できることは日々の活力だった。今後も他の団員の活躍が楽しみだし、自分も負けないように世界のことを考え福岡から行動していきたい。

最後になりましたが、貴重な講義を頂いた講師の皆様、訪問を受け入れて頂きました皆様をはじめ関係者の皆様に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。



新たな価値観の芽生え、 人生の針路の舵を切る

能塚 靖裕
株式会社西日本シティ銀行

Global Wings **2** 班

まず今回のグローバルウィング2015において講師を務めて頂いた皆様、また我々の訪問を快く受け入れ頂いた各企業や機関の皆様、国内外問わず私共の為に力添えをいただいた方々へ感謝致します。

「躍動するアジア」を体感する事を主旨として、発展著しいタイ、そしてアジア最後のフロンティアと言われるミャンマーの両国を訪問し、想像もしていなかった現実に触れ、これまでは異なる海外への感覚を抱く事が出来た。

日本や福岡県は、アジアの国々へ非常に立派な支援を手掛けており、そういった支援から素晴らしい人材や技術が生まれ、様々な国の発展に大きく貢献している。その確かな現実を自分の目で見る事が出来、自分のこれからの役目の一つとして、この事実を多くの人へ伝えていく必要があるとの思いを抱くに至った。また、そうは言いながらも日本の当り前の感覚を現地への支援や開発手法に全て当て嵌める事は、必ずしも幸せには直結しないということも、現地の方々との触れ合いや、ヤンゴンで夕食をご一緒させて頂いたJICA専門家として「シャン州北部地域における麻薬撲滅に向けた農村開発プロジェクト」に尽力されている吉田様とお話の中で認識させられた。

それぞれの訪問国で、毎日どこに目を向けても新しい気付きの連続であった。特にミャンマーでは、OISCA研修センターに所属する青年は、自身の故郷や国の農業を変え、自分の力で豊かにしていきたいという私も含め今の彼らと同年代の日本の青年からは想像も出来ないような高い志を抱いていたこと。また、日本人は控え目な人柄や謙虚さがアジアをはじめ世界各国から好感をもって見られているが、その国民性から発信力に欠けるとも言われている。しかしながら、タイの教育現場では社会での競争力を自然と身に着けられるよう、幼少の頃から「考える事、行動する事、表現する事」を怖がらない人間に育てるための教育プログラムが整備されている等、日本との大きな違いがあることに非常に考えさせられるものがあった。

事前研修で講義を頂いたJ-SATコンサルティング代表取締役の西垣様の言葉に「この研修を通じて学んだ事で人生の針路をほんの1°、舵を切っただけ」とあったが、この海外2か国への訪問は私の価値観を変える事が出来た非常に有意義な研修であったと感じている。

本研修での経験を通じ、私は、これからの日々の生活において自分には何が出来るかという事を考えながら、仕事や地域社会への貢献に繋げていきたいと思う。



福岡県青年リーダーとしての自覚

福岡 静
学校法人福岡女学院

Global Wings **2** 班

今回グローバル・ウィングには、海外・現地の人々との交流や企業訪問を通して、日本・福岡に対するイメージや海外で働くことについて学びたい、日々変わりゆくエネルギッシュなアジアを体感し新たな経験を積みみたいという思いから参加しました。

ミャンマーでは、都心部のあちこちで行われる建設工事やインフラ整備が目まぐるしく変化する街並み。馬車や機織りで生計を立てる村、農業・畜産技術を学ぶOISCAの研修施設では現地の人々との交流を通して、文化や歴史だけでなくミャンマーで暮らす人々の現状を知ることができ、新しい発見や驚きの連続で今後の経済発展の可能性を感じました。

タイでは、小学校や企業訪問、現地で働く日本人の方々との交流を通して、将来の展望や海外でのビジネスについて貴重な話を聞くことができ、社会人としての自覚を再認識させられました。一方、高層ビルの片隅に簡素な造りの家々が建ち並び、車の渋滞で埋め尽くされた道路や街の様子からは、著しい発展に伴う課題を目の当たりにしました。

分野別研修では人材育成・教育班に属し、小学校訪問時の授業参観を通して、自尊心を育てる教育や授業参加を促す仕組みのカリキュラム等、今後の日本の教育の在り方について大変参考になる取組みを学ぶことができました。

ミャンマーとタイの海外研修は、躍動するアジア諸国の現状と課題を実際に肌で感じる事ができ、毎日が刺激的でとても充実した時間でした。

海外研修以外にも多くの貴重な経験をすることができました。

講義では研修国についての知識・理解だけでなく、福岡を拠点に様々な分野で活躍されている方々のお話を聞くことができ、自国理解ができていなければグローバルは成り立たないことを学びました。また団員は学生、社会人、年齢も異なる若者で構成されており、自分の知らない知識や思いもつかないような素敵なアイデアを持っている方ばかりで、研修を通して様々な意見交換ができたことで、自分の視野をより一層広げることができたと思います。

この事業で学び、経験したこと、そして出会えた方々との縁は、私の大切な財産です。

今後も、アジア諸国の動向に敏感であり、「異文化と働ける人材育成」に尽力し、福岡から日本を、アジアへと発信していきたいです。

このような機会を与えてくださった全ての方々に感謝するとともに、福岡県青年リーダー育成のバトンを次世代に繋ぐことができるよう、日々精進していきます。



福岡、そして日本と世界とのつながりを より一層強くすることに貢献したい

横尾 春菜
九州大学法学部2年

Global Wings **2** 班

第4次研修(海外研修)で訪れたタイとミャンマーについて、私は日本・福岡との繋がりを多く感じる事が出来た。

9月の第1次研修や10月の第3次研修では、タイやミャンマーで活躍されている様々な方々のお話を聞く事が出来た。現地で仕事をする、若しくは現地の方々を対象に仕事をするというのには、ビジネスの難しさに加えて言語や文化という大きな壁があることは容易に想像がつくことなのに、現地の生活をより良くしよう、現地の役に立とうと奮闘している姿は、近い将来世界を相手に仕事したいと考えている私を勇気づけてくださった。

ミャンマーのパコック・オイスカ研修センターを訪れた際には、日本の農業技術がミャンマーの前途有望な若者によって吸収されており、彼らの中には日本へ派遣される研修員もいることを知った。来年このセンターは20周年を迎えるという。私が知らなかった異国の地で日本が長年にわたり多大な貢献をしていることを知って嬉しく思った。また、彼らの自分の国や故郷を思う姿はとても眩しく、家族から離れての厳しい研修生活を送っているにもかかわらず、生き生きとした表情で楽しみながら農業実習や日本語の学習をする姿勢には同じ世代の仲間として刺激を受けた。

タイでの分野別研修で、まちづくり班の一員として訪問したTEAM of Group Co.では、タイの交通渋滞解決のためのプレゼンテーションを聞く事ができた。一例として、地下鉄を伸ばして公共交通機関の利用の促進をしていると教えてくださった。私はそれを聞きながら、バンコクの変化を感じる一方で、なされる対策は福岡のものに類似しており、今後抱える問題も福岡と酷似するように思えた。ただ、政策や課題が似ている分、互いに教え合えるので、今後も福岡にとってタイは目を離すことが出来ない存在であることに変わりはないと思った。

他にも、ミャンマーでは日本人墓地を訪れたり、ヤンゴンスクエアで数多くの日本製品を目にしたたり、タイでは夕食交流会にお越し頂いた福岡県にゆかりのある方々や現地の大学生などとお話出来たり、最終日は伊勢丹を視察したりと、様々なところで日本や福岡とのつながりを感じる事ができた。

この研修は、至る所で、意外なところに日本と世界の結びつきがあることを私に気づかせてくれた。いかに自分が無知であるかを痛感し、もっと様々な分野で世界との結びつきを学ぼうと思った。そして将来的には、常に福岡が世界から学べることはないかとアンテナを張り、この研修で経験したことを活かして、福岡とタイやミャンマー、さらには日本とアジア・世界との繋がりがより一層強く太いものになるよう貢献できる人材になりたいと思った。



アジアと福岡の架け橋

東 宏輔
西日本鉄道株式会社

Global Wings **3** 班

私の勤める西日本鉄道株式会社は、国内で実績のある事業を近年海外にも展開し始めている。市場縮小傾向にある国内から拡大の余地のある海外へと事業領域を拡げていくことは、最重要課題の一つとらえている。私がこの「青年の翼」事業に参加するにあたっての期待は、成長するアジア圏に対して、福岡に事業基盤を置く弊社がどのように関わるかという感性を身につけることにあった。

国内での事前研修では、多数の講話を通して、様々な角度から福岡と海外のつながりを考えることができた。実際に海外で事業を営む方々から、その地域の秘めているポテンシャルを事業に取り込んで成功していく話を聞くと、自然と胸が高鳴った。そのような講師の方々の事業に対する真摯さと粘り強さに感銘を受けた。成功の裏には、それぞれ大変な苦労があり生半可な気持ちで成せるものではないと痛感し、私自身も日々海外事業をはじめとした知識を深め、考えていかなければならないと思いついた。元々アジア地域には、安価で豊富な労働力を擁する生産基地だという認識を持っていたが、海外研修において現地に出会った人々や訪問した企業、自分の足で見てまわった街並みからは、魅力的な消費市場としての印象を強く受けた。特に都心部の成長する勢いには驚かされた。しかし、ビジネス環境には厳しい面も多くあるとの話をバンコクでの福岡県人会や福岡とゆかりのある方々の夕食交流会を通して聞くことができた。現地における法律や都市計画の不整備を原因とする無秩序な開発、労働力のクオリティの低さ、外資への規制等、越えなければならぬハードルは山積みであった。

私は分野別研修での班分けでは「まちづくり班」に属し、バンコクを交通の視点から考察した。バンコクの移動行程中にも遭遇した交通渋滞は深刻な問題であり、時間や機会のロスから経済に与える損失も計り知れない。訪問先企業では、都市の発展から遅れをとっている交通インフラの整備の計画を聞くことができた。さまざまな交通モードを新設、利用促進することで、交通渋滞の緩和や環境負荷軽減が進み、今後バンコク経済はさらに活性化していくと思われる。これから成長していく沿線地域の市場にも注目し、事業の可能性を考えていきたい。

私はこの事業を通して、アジアとつながりを持つスタート地点に立つことができた。ここで学んだこと感じたことを足がかりとして、これからはアジアに関する見識を深掘していかなければならない。また、職場のメンバーや周囲の人には、この貴重な経験や考えたことを伝え、私がアジアと福岡の架け橋となりたい。



これからの日本を活気づけられる エネルギッシュな人間になりたい

安部 日向子
九州大学農学部3年

Global Wings **3** 班

この「福岡県青年の翼：グローバル・ウイング2015」では多くの事を学んだ。様々な方々の貴重なお話で、自分の視野が広がり、他のメンバーとも沢山お話をした。社会人の方々からお仕事のお話を聞いたり、同じ学生の方と話ししたりとても有意義な時間を過ごした。

海外研修では、ミャンマーとタイを訪れた。まず驚いた事は、両国とも非常に発展した国だという事である。高層ビルが立ち並び、道路道が整備されている様子がとても印象的であった。これらの国を訪れる前は、まだまだ発展途上の国であろうと考えていたが、そのような事は決してなかった。

ミャンマーで、一番印象に残っているのはオイスカ研修センターでの体験である。オイスカ研修センターでは、農業を学ぶ若者達が、住み込みで生活しており、私達を非常に歓迎してくれた。研修生達は、いつの日か日本で研修を受けることを目標に、日々日本語の学習に励んでいる様子が非常に印象的であった。

タイでは、チュラロンコン大学付属小学校の教育を見てきた。ここは大変綺麗な小学校で驚いた。学内に芝生の運動スペースや、図書館もあり、施設が非常に充実していた。ここでは、小学校低学年から、英語学習を行っており、小学生達が英語を話している事に非常に驚いた。

海外研修を通じて感じた事は、ミャンマーの人も、タイの人も非常に活気があり、生きていく事に対して全力を尽くしていると感じた。発展著しい、ミャンマーとタイという国に住んでいるからか、人々の活気に私は非常に衝撃を受けた。

私は、これまでずっと日本に住んでいる。日本は、非常に発展した国で、何不自由なく、満ち足りた生活を送っている。子供の頃から、いろいろなものを守られて育ってきたし、危機感を覚える事はなかった。この満ち足りた生活を送り続けていく事に関して、私は少し危機感を覚えるようになった。確かに、日本は暮らしやすく、治安も良い、素晴らしい国である。しかし、このままだと、これからの日本を作っていく私達は、平和に終わらせて活気のない人間になってしまうという危機感を覚えた。

私は、これからもっと海外に出て様々な活動をしたいと思うようになった。日本の中の日本ではなく、世界からみた日本を見たい。そして、これからの日本を活気づけられるエネルギッシュな人間になりたいと思う。



目で見る現地のリアル

糸数 基樹
北九州市立大学外国語学部1年

Global Wings **3** 班

「自分の可能性を広げたい」。そう思っていた時に大学の先輩に勧められたのが、グローバルウイングです。僕の夢は、「自分にしかできないことで誰かの役に立つ」ことです。自分にしかできないこととは何か、誰の役に立つのか、それを見つけるために必要なことは、経験と刺激だと思っています。その二つと自分に足りない力、コミュニケーション能力を手にいれるためにはこの研修に参加することが絶対に必要だと思い、参加を決意しました。

第一次研修の時点から刺激的な学びが多かったです。発言力やグループワークの進め方など、社会人のすごさを感じました。ミャンマーで訪れたOISCA研修センターでの交流会では、研修生や職員の方々に大変歓迎していただき、気の合う友達もできて楽しい時間を過ごしました。バンコクでの夕食交流会では、バンコクで活躍されている日本人の方々の話を聞いたり、現地の学生や社会人の方々と一緒に食事を楽しんで仲良くなったり、貴重な体験ができました。自主研修で訪問したタイの名門、チュラロンコン大学附属小学校では、最先端の設備や楽しそうに学ぶ子ども達の姿を見ました。「徳」に重点を置いた教育方針で、日本の学校教育のあり方を考える上で大きなヒントとなりました。ミャンマー、タイ共に、街の人も小学生ぐらいの若い売り子たちも、日本と比べると経済的に裕福でない環境かもしれませんが、しかし人々は、とても幸せそうな笑顔をしていました。その純粋な笑顔に心を打たれ、「幸せ」とは何か考えさせられました。そして、発展途上国と呼ばれる国に支援をする必要が本当にあるのか、僕の中でひとつの課題が生まれました。

グローバルウイングの研修全体を通して、そのすべてが僕にとって新しい経験でした。人材育成・教育班では、リーダーを務めさせていただきましたが、まわりに頼ってばかりでした。サポートしていただいたみなさんに感謝しながら、学ぶことが多かったです。「アウェイの地で人は成長する」。この言葉を信じてこれからもっと、世界中を旅したり、海外ボランティアに挑戦したりと、どんどん新しい地に身を投じていきたいと思いました。普通に大学で過ごしているだけではできない出会い、体験でした。



海外視察で感じたコミュニケーション

緒方 亮介
九鉄工業株式会社福岡本社

Global Wings **3** 班

私は、歴史や文化の違う異国の地で活躍する方がどのようにしてコミュニケーションを図っているか学ぶ、ということテーマに今回の研修に望みました。第1次研修から第4次研修までを終えて感じたことは、相手の事を真剣に知ろうという気持ちが強い人、そのための努力を惜しまない人ほど、円滑なコミュニケーションを図ることができるということです。

私がこのことを強く意識したのは、第4次研修でタイを訪れた際に福岡県人会の方や福岡とゆかりのある駐在員、学生の方々の夕食交流会において、タイ星和樹という商社を起業した加藤様に色々なお話を伺ったことがきっかけでした。加藤様は「若い人が積極的に海外に視察へ行くのは非常に良いことだ、しかし、その国の事情(政治、風土、国民性等)を知らずして訪れるのはもったいない。ただ単純に行けば何か得られるだろうという考えでは何も得られない」とおっしゃいました。私はこの言葉に深く感銘を受けました。今回、1～3次研修までを通して、視察国の現状(経済成長、宗教について等)について学び、さらにインターネットを活用した調査(ラスタフロンティアをキーワードとしてミャンマーの経済成長について)を行い視察に臨みました。このことにより現地で多くの方とコミュニケーションを図ることができ、ミャンマーにおける経済格差(地域格差)が想像以上に深刻であったこと、地域に特化した産業(農業、観光業)の発展が重要であることを、肌で感じる事ができました。

私が普段工事現場で現場監督業務を行う上で、今回得られた経験を活かすことで、発注者や協力会社の作業員と意思疎通を図り、安全管理、品質管理の面において、お互いの思い違いを無くし、適切に指示を伝えていきたいと思っています。また、アジア各国の経済発展に伴い、今後海外或いは日本国内において、外国の方がビジネスパートナーとなる場面が多くなると思いますが、相手のこと(母国文化、風土等)をしっかりと知ること、円滑なコミュニケーションを図っていききたいと思っています。

最後に今回の研修において、貴重な講義や助言をいただきました講師の皆様へ深く感謝いたします。海外視察においては、密なスケジュール、過酷な移動と少々きついと感じることもありましたが、多くの文化、人を知ることができ、自分自身の価値観や視野が広がりました。今回の研修により今後の人生において1度でも舵を切ることができたと感じております。ありがとうございました。



もっと活動の場を広げて、福岡で活躍できる人材を目指して

甲斐 紗由美
福岡市水道局

Global Wings **3** 班

私は、海外に興味があり、これまでさまざまな国を訪れてきました。昨年、業務を通じてフィジー共和国を訪れ、これまでの観光を目的としたものとは違い、自分自身本当に得るものが大きく、また、多くのことに気づき、考えさせられる機会となりました。この経験をきっかけに他国を知り、視野を広げることで自分自身もっと成長したいと思うようになり、このグローバル・ウイング2015に応募しました。

この事業に参加したことで、海外で活躍する企業の方や普段の生活では関わる機会の少ない方々の貴重なお話を聞くことができ、私自身得るものがとても多かったと感じています。

特に、海外研修では、ミャンマーとタイを訪問し、どちらの国も初めて経験することばかりでした。ミャンマーでは、オイスカ農業研修センターを訪問し、日本では経験できないミャンマーに密着した生活を送ることができました。オイスカ研修生との交流の中で、それぞれが夢を持ち、それに向かって努力している姿は私にとって刺激的で、自分自身のことを考えさせられる機会となりました。また、世界に誇る仏教遺跡が立ち並び景色は素晴らしく、ミャンマーはとても魅力的な国であると感じました。

タイでは、日本企業も多く進出し、バンコク中心地にはビルが立ち並び、活気の溢れる街であると感じました。BTSやBRTの公共交通機関はあるもの予想以上の交通渋滞にとても驚かされました。企業訪問を通じて、この交通問題に関する話や産業、学校教育等について現地で学ぶことで、日本との違いを肌で感じることができました。また、タイで活躍する方々との意見交換の場では、自分の視野の狭さに気づかされました。

このように海外研修をはじめ様々な研修を通して、多くの方と出会い、自分自身成長する機会をたくさん与えていただきました。そして何より、一緒にこの研修に参加した仲間との時間は、これまでになかった発想や多くの気づきを与えてくれました。

今後は、このつながりを大切に、もっと活動の場を広げていきたいと考えております。そして、この研修で得た知識や考え方、また自分に足りない部分を業務や私生活の中でしっかり改善、活かしながら福岡で活躍できる人材を目指していきたいと思っております。

最後に、国内研修で貴重な講義を頂いた講師の皆様、研修を共にした仲間、研修をサポートして下さいました方々、後押しして下さいました職場の方々には心から御礼申し上げます。



ミャンマーの同世代の青年と、夢を絶対叶えようと誓い合った約束やあの空間、あの時間を生涯忘れない

富久 萌
中村学園大学教育学部3年

Global Wings **3** 班

今の私は無知すぎる。この思いが、私がGWに参加することを決意した一番の理由です。私の住む福岡県はもちろん、日本のことや、日々めまぐるしく変わる世界情勢、世界から見た日本など、自分の住む国のことなのに何も知らず、説明もできない自分に歯がゆさを覚え、何とかしたいと思っていました。また、私は将来小学校教諭になりたいという夢があります。今の私の知識では、TVで見た薄っぺらな情報を薄っぺらな言葉で子供たちに伝えることになってしまう、そうではなく、これからの未来を担う子供たちだからこそ、自分の住む日本や世界について間違ったことを教えたくないし、自分の中で理解し、根拠を持って未来への可能性が広がる授業をしたい、私が見た世界や社会の正しい情報をきちんと伝え、教えたいと強く思い、参加することを決めました。

生まれて初めての海外、生まれて初めて降り立った異国の地。目の前に広がる景色や建物に、初めて味わう食べ物、耳にする言葉、目にする全てが新鮮で、どこに行っても興奮が抑えられませんでした。研修を通して、私が一番印象に残った訪問地は、ミャンマーのパコックにあるオイスカ農業研修センターです。そこには、私と同世代の若者が、農業や畜産などを毎日一生懸命学んでいました。ディスカッションをしながら、一番楽しいことは何ですか？と聞くと「オイスカで日々新しいことを仲間と協力しながら学ぶこと」と答えてくれ、将来の夢は？と尋ねると、まっすぐに私の目を見て、いきいきと「ここで学んだことを地域の発展のために活かすこと。そのお手伝いがしたい。」と教えてくれました。未来を見据えて今を生きるその姿にとても感動したのを今でもはっきりと覚えています。それから私の夢の話、いつか日本に来たら食べたいものなどを話し、国も生きる環境も違い、言葉はぎこちなくしか伝わらなくても、夢を絶対叶えようと誓い合った約束や、この空間、あの時間を私は生涯忘れません。

ミャンマー、タイでは普段絶対に経験できないことを経験し、学ぶことができました。少しではありますが、こうしている今でも進化し続けているアジアの“今”を垣間見ることができたように思います。この1週間は私にとって、とても濃い1週間になりました。同時に、これからの私の糧になる宝物になる時間でした。

それでも、まだ私は無知すぎると感じます。これをきっかけに、これからも色々なことに挑戦し、学び続けていきたいと思っております。有難うございました。



ミャンマーのオイスカ研修センターで感じたお金では測れないもの

三角 拓也
福岡県信用保証協会

Global Wings **3** 班

私は、普段中小企業を支援する立場にあることから、成長著しい新興国の現状を体感し、中小企業の海外展開支援に活かす目的で参加を決意しました。今まで海外には度々訪れてはいたものの、東南アジアにはあまり目を向けてはならず、ニュースや新聞を通じて情報を得るのみでした。そのような中で、今回のグローバルウイングは自分自身の今まで知らなかったことを知れるとても貴重な機会であると思い、そしてなによりミャンマー民主化後初の総選挙という歴史的な瞬間に立ち会えるかもしれないと思い、そこに魅力を感じ、上司に掛け合って応募したことを覚えています。

第4次研修の海外研修で、一番の衝撃は、タイの高層ビル群、そして交通渋滞でした。日本以上に高級外車が道路を走り、ショッピングセンター内には高級ブランドのショップにスケートリンク。今まで日本では見ることができない経験でした。そのような中で、日本の素晴らしい品質の果物を販売するMRT FOODS THAILANDの女性社長小村真衣香さんのパワフルな姿には目を見張るものがありました。中小企業を支援する立場として、小村さんのような事業意欲溢れる社長がもっと福岡から出てきて欲しいと思うと同時に、そのような人を一人でも多く支援できる職業にあることをあらためて幸運に思います。

その反面、ミャンマーで訪れたパコックの研修センターで懸命に働く青年たちからは、お金では計れない暖かさや優しさを感じました。豊かではないが、懸命に働く姿、そして他者への思いやりの気持ち。その中でも、ディスカッションの時間に聞いた、ある青年の「裕福になったら、困っている人たちが夢を叶える為にお金を貸してあげたい」という言葉はこれからも忘れないと思っております。同時に、私自身の仕事におけるモチベーションになり続けると思っております。

この研修を通じ、とても貴重な経験をすることが出来ました。普段関わることの少ない職業の方や大学生、現地で活躍している日本人の方々と様々なことを語り合い、学んだことはこれからも一生忘れることはない思い出です。この研修に関わった全ての人に感謝すると共に、一生懸命頑張った仲間同士の絆をこれからも大切にしたいと思っております。

半年に渡る長い研修を無事に終えて

福岡県新社会推進部青少年課
渡辺 伸也

国際的な視野を備え、地域で活躍する青年リーダーを育成したい。我々の切なる思い、大きな目的のもとにこの「第18回福岡県青年の翼(グローバル・ウイング2015)」を実施しました。

夏の暑い盛りの面接に始まり、残暑の厳しい9月の第1次研修、フィールドワークをはさんで10月下旬の第3次研修、11月の海外研修、帰国直後の第5次研修、そして真冬の地域実践活動を経て春先の報告会まで。

これほど長期間に渡って、多くの方々に関わり、力を尽くして下さったこの事業に参加した意味を、皆さんは今ほど感じ取ってくれているのでしょうか。

特に海外研修にあたっては、ミャンマーでは民主化後初の総選挙実施日と渡航日が重なり、政情不安が危惧され、そしてタイでは渡航直前に発生した爆破テロで治安が不安視されましたが、様々な方から温かい手を差し伸べて頂き、渡航を中止することなく、結果として非常に充実した研修を実施することができ、多くの収穫を得て無事に帰国することができました。

単に海外体験をしたいのであれば、格安航空会社が増え、場合によっては日本国内よりも安く海外に渡航することも可能になった昨今、個人で旅立った方がはるかに気楽なはず。旅行代理店などを通じて海外ボランティア体験ができるツアーも巷には溢れています。

それでもあえて、行政機関が実施するこの事業に参加し、様々なノルマを課せられながらもそれを乗り越え、長期間のつらくてほんの少し楽しい(?)研修を無事終えた今、皆さんは自分自身の内面の変化を感じているのでしょうか。

この研修を通じて学んだことは人それぞれ違うと思います。今すぐ結果がでるものでもありません。それでも皆さんは以前よりも確実に成長しているはず。

何故なら皆さんは、その目でその耳で、五感をフルに働かせて躍動するアジアの現実を体感してきたのですから。

福岡からバンコクを経由してヤンゴンまで移動し、飛行機を乗り継いでバガンまで飛び、そこからさらに車で2時間も揺られてやっと辿り着く遥か遠いミャンマーの内陸部。その痩せた大地が、日本人の農業技術指導によって緑豊かな農地に生まれ変わりつつあり、そこに日本語が堪能なミャンマーの青年達がいて、日々切磋琢磨しながら厳しい共同生活を送っている事実。

先の大戦で、10万人以上の日本人が飢えと病に苦しみ、心ならずも命を落とした国ミャンマー。その中心都市ヤンゴンの郊外にある日本人墓地とそこにある「福岡県ミヤン



ミャンマー・オイスカ研修センターにて

マー戦没者慰霊碑」を、現地の方が毎日心を込めて手入れし、守ってくれている事実。

そんなミャンマーの奥地で、ケシ栽培撲滅のために人生を捧げている福岡県出身の先輩がいる事実。

福岡とは比較にならないほど発展したバンコク都で、旺盛な消費マインドを存分に満たす大型ショッピングモールと数多くの外資系高級ブランドショップと、目が眩むほどまでに磨き上げられた煌びやかな歓楽街

が、多くの外国人を惹きつけている事実。

そんなバンコク都で、長い駐在生活を送りつつ、異文化の中でもリーダーシップを発揮して、日本の経済活動の最前線で戦っている多くのビジネスマンがいる事実。

これらの圧倒的な事実を皆さんは肌で感じて帰国しました。単なる机上からの知識では得ることのできない、目に見えない大きな何かを得ていることでしょう。

さらに皆さんは、各界で活躍されている多くの方々からの熱いメッセージを受け取っています。そうした方々もまた、皆さんと同じ年代の頃に、多くの先輩たちから同じように激励され、熱い思いを受け継ぐことができました。そしてそれは今、皆さんに受け渡されています。

遠からず、その熱い思いを次の世代に受け渡す日がやってきます。その時まで、目の前の仕事や学業に真摯に取り組むこと、それぞれの立場で青年リーダーとして活躍できる存在になって欲しいと心から願っています。

最後になりますが、この「第18回福岡県青年の翼(グローバル・ウイング2015)」参加者のために、国内・海外での研修において、講義や視察、トークセッションなどにご協力を頂きました皆様、熱い思いを持ってこの事業に関わってくださったすべての皆様に心から御礼申し上げます。

そして戦後70年という節目の年に、ミャンマーへ渡航する機会を与えて頂いたことに感謝するとともに、すべての戦没者の方々のご冥福を心よりお祈り申し上げます。



福岡県ミャンマー戦没者慰霊碑



Snapshots
with
Message

1 班 Snapshots with Message



Koyuki Imamura

Profile p34

この写真はバンコクのエラワン廟という観光地で、今年の8月に爆破テロが起きた場所です。8月に旅行でタイへ行った際、偶然テロが起きた数時間後にこの場所に訪れました。現在も多くの人が祈りを捧げ、花を手向ける姿を見て、私もあのととき目の当たりにした光景を忘れてはいけなと再認識しました。



Miruto Oohara

Profile p34

研修4日目バガンの漆工芸見学。施設内では約20人の従業員たちが工芸品を手作りで作っていた。細かい模様を彫り、金箔を塗り1つ1つ思いを込めながら作る姿に我を忘れて見入っていた。

この素晴らしい伝統を後世まで伝える事が大切だと思った。



Satoshi Koikawa

Profile p35

ミャンマー、バガンにて。ちょっと散歩にとホテルから顔を出した時、托鉢の子供達に出会った。

只々黙々と歩む長い行列、寄進に歩み出て静かに手を合わせる住民の方々。仏教の聖地に数百年も前から宿るだろう風景は、心が洗われる美しさだった。



Moe Tamarushima

Profile p35

ミャンマーやタイでよく見かけた乗り物。トラックの荷台に乗って移動が当たり前の世界だった。私たちも11月10日の早朝、掃除を終えた後、パッカンジのマーケットに行くためにトラックの荷台に乗って移動した。時速40kmぐらいだったらしい。タイの大学生はこのトラックのことを「ミニバス」と言っていた。また、バイクで3人乗りもよく見かけた。



Jyunichi Hayato

Profile p36

海外研修3日目に訪れたパッカンジのマーケットでは、朝早くから、川魚や野菜、果物、花などを路上で売っており、日本で見た事あるようなものからなんだこれ、といったようなものまで、多種多様な物があり、地元民の方で賑わっていました。その中で一番おどろいたのは、羊の肉を売っていた方で、肉はもちろん、頭や心臓、骨まで全て売ってしまうようです。

店舗型の店には、日本製やその他外国製の日用品も多く有り、ごはんなどを食べている方などもいました。



Shotaro Harada

Profile p36

私は最終日に訪れたバンコクの涅槃寺に心が酔いしれた。ひんやりとした空間に巨大な涅槃像が悠然たる姿で存在する。殺伐とした雰囲気はなく抱擁してくれるそんなぬくもりを体全体で感じ感銘を受けた。鮮やかな螺鈿細工がお寺の隅々に施されており、私は神妙なまなざしで涅槃像をおがむことができた。



Aoi Minohara

Profile p37

研修2日目、パコックチャウカー村の小学校を訪問しました。先生方をはじめ生徒たちやその保護者の方々も温かく出迎えてくれました。団員が持参していた折り紙を使ってみんなで紙飛行機を作って飛ばしたり、サッカーをしたりしてとても楽しい時間を過ごすことができました。小さな小学校でしたが、子どもたちの笑顔がふれる素敵な小学校でした。



Shota Watanabe

Profile p37

エビの生産量で高い世界シェアを誇るタイ国。写真は鮮魚店で売られていたかなり大きめのエビですが、価格は1キロ当たり約1,400円。日本のスーパーではこの価格ではなかなか見かけることはありません。豊富な資源を保有している国の強さを実感させられました。



2班 Snapshots with Message



Yuuki Ichiki

Profile p38

ミャンマー・パコック市場近くでの一コマ。
二段はしごに登り作業する男性。安全帯も身につけず、ヘルメットもかぶらず、素手で作業している。この現場に出くわした時、思わず叫んだ。「危ねえなあ!!」と。ミャンマー視察の貴重な経験です。



Yuuki Inoue

Profile p38

漆工房にて。漆器に施されたきめ細やかで美しい細工と職人さんの技術に感動しました。そこで作られている漆器はどれも美しかったです。私は自分用にコップを購入しました。大切に使いしていきたいです。



Kaori Oono

Profile p39

タイの交通渋滞の写真。通勤、帰宅の時間帯で日常的に起こっている。日本では連休、祝日のみでみられる現象を現地で目の当たりにし、大変衝撃を受けた。現地の方にとって渋滞による遅刻というのは日常茶飯事らしい。



Takahiro Katsutani

Profile p39

タイの街中を走るBTS（高架鉄道）。自動車が多く渋滞が頻繁に起きているバンコク都心部で、大変便利な公共交通手段の一つとなっています。運行間隔が2分～8分で列車がやってくるので、待ち時間を感じることはありません。今後さらに新たな路線が増えていくことで、バンコクの観光スポットを渋滞に関係なく巡りやすくなると思います。



Ayumi Koga

Profile p40

語学を習得するにはネイティブと話す必要がある！ということで、タイの学生は観光地で観光客をつかまえ、外国語の練習をするそうだ。証拠写真とともに課題提出らしい。なるほど。ワット・ポーにて。



Yasuhiro Notsuka

Profile p40

ミャンマーの市場での写真です。日本では「食の安全」が注目されている昨今、この日の気温は30度を超えていましたが、生肉を常温で地面近くに陳列している現地のマーケットの光景は衝撃的でした。衛生面が不安...



Shizuka Fukuoka

Profile p41

チャウカー村小学校にて・・・
チャウカー村小学校訪問時、生徒による歓迎の挨拶。ミャンマーでは目上の人に尊敬の意を表する際に、腕を組んだポーズをします。
男女共に緑色のロンジー（日常的に着られている伝統的民族衣装）を履き、顔にはタナカ(タナカという木から作られる天然の日焼け止め)を塗っています。



Haruna Yokoo

Profile p41

エメラルド寺院には、護衛が常駐。戦中は敢えてオカマになって兵役を逃れる男性が多かったが、最近は男性に囲まれたいのために護衛に立候補するオカマが増えていたとか。なるほど。初めて知りました!!



3班 Snapshots with Message



Kosuke Azuma

Profile p42

360度見渡す限り無数の仏塔が集まるバガン遺跡。それぞれ個人が「功德」のために私財を投じて建立した仏塔の集合体とのこと。ミャンマーの深い仏教信仰から、自分自身は何を大切にしているのか改めて考えさせられた。



Hinako Abe

Profile p42

エメラルド寺院での一枚です。猿と鬼が、建物を支えているのを真似て、メンバーで写真を撮った事が、印象に残っています。エメラルド寺院は、非常に煌びやかで、とても感動しました。



Motoki Itokazu

Profile p43

ミャンマーのバガンにて、観光地では、たくさんの売り子達を目にした。中でも、小学生くらいの年の売り子達が目立った。彼らの育った環境は想像もできないが、いつか自立して、別の形で力になりたいと感じた。



Ryosuke Ogata

Profile p43

私がミャンマーで一番驚いたのは、携帯電話の普及率の高さです。平地のため、高い電波塔一つで広範囲エリアをカバーできる。インフラ整備より先に情報化が進んでいて、日本における経済成長との違いを感じました。



Sayumi Kai

Profile p44

この写真は、ミャンマーのオイスカ農業研修センターでの宿泊の様子です。自然に囲まれ、気温の高いこの地では、虫を通さず、風通しの良い蚊帳を使用した寝床となっていました。その土地にあった生活様式を体験することができ貴重な経験となりました。



Moe Tomihisa

Profile p44

チャウカー村の小学校を訪問した際に出会い、仲良くなったモモニュちゃん。まっすぐな瞳ときらきらとした笑顔が印象的な女の子。なんと、後日マーケット視察で偶然再会したのです。広い町なのにまた出会えたこと、覚えて声をかけてくれたことが嬉しくて、奇跡のような素敵な出会いに感動しました。



Takuya Misumi

Profile p45

この写真はミャンマーのオイスカ研修センターで農業体験をした時の一枚です。お金では計れない豊かさを教えてくれたミャンマー青年と過ごした日々がこの研修の中での一番の思い出です。

国内研修で講義を頂いた講師の皆様

水谷 俊博 様	日本貿易振興機構(ジェトロ) 海外調査部アジア大洋州課 課長代理
占部 賢志 様	中村学園大学 教育学部 教授
田中 克明 様	田中藍株式会社 常務執行役員営業本部長兼九州事業部長
長根 寿陽 様	新日本製薬株式会社 総合管理部開発事業室室長
西垣 充 様	(株)ジェイサットコンサルティング 代表取締役
アルド ブロイゼ 様	IT & IP Strategy Advisory Group SA(JAPAN) Deputy General Manager
ジョエル ブロイゼ 様	IT & IP Strategy Advisory Group SA(JAPAN) General Manager
水谷みずほ 様	合同会社みずトランスコーポレーション 代表取締役
花野 博昭 様	合同会社みずトランスコーポレーション 代表取締役副社長
彦坂 延良 様	公益財団法人西日本研修センター 研修課長
たいら由以子 様	NPO法人循環生活研究所 理事長
竜口 英幸 様	西日本新聞TNC文化サークル取締役企画事業部長

海外研修で視察や交流会でご協力頂いた皆様

木附 文化 様	オイスカ研修センター (パコック) Country Director
オイスカ研修センター (パコック)の皆様	
チャウカー村小学校の皆様	
吉田 実 様	国際協力機構(JICA) 専門官
渡辺 桂三 様	ヤンゴン市水供給・衛生アドバイザー (福岡市水道局派遣)
Suporn Chaidejsurya 様	チュラロンコン大学付属小学校 Principal and Deputy Dean
チュラロンコン大学付属小学校の皆様	
Chawalit Chantararat 様	TEAM GROUP COMPANY Chief Executive Officer
TEAM GROUP COMPANYの皆様	
小村真衣香 様	MRT FOODS (THAILAND) Managing Director
岡本 貞明 様	ヤクルト・タイランド社長 (福岡県人会会長)
バンコク夕食交流会にご参加頂いた皆様	

そして、この第18回福岡県青年の翼/グローバル・ウイング2015に
ご協力を頂きましたすべての皆様

団員一同、心から、熱く厚く御礼申し上げます。

募集要項

1. 目的

県内青年を、飛躍的に発展し続けるアジア諸国へ派遣し、躍動するアジアの現状を体感させることで、国際的視野を備え、企業・団体等の中核となって活躍する青年リーダーを育成する。

2. 主催

福岡県青年の翼実行委員会(以下「実行委員会」という。)

3. 事業内容

- (1)訪問国(都市) ミャンマー(ヤンゴン)・タイ(バンコク)の2ヶ国2都市
※訪問国(都市)は、変更になる場合があります。
- (2)訪問時期 平成27年11月8日(日)～15日(日)
7泊8日
- (3)募集人員 24名
- (4)研修等
- ① 第1次研修(2日間) …9月5日(土)～6日(日)
研修全体のオリエンテーション、役割分担、訪問国研修など
 - ② 第2次研修(フィールドワーク) …第1次研修と第3次研修の間の任意の日
海外訪問先に関連する県内の企業・団体等への視察訪問
 - ③ 第3次研修(2日間) …10月17日(土)～18日(日)
訪問国及び訪問先研修、青年交流会等企画、結団式(団員証交付)
 - ④ 第4次研修(海外研修)
(7泊8日) …11月8日(日)～15日(日)
関連施設訪問、現地青年や現地で活躍する日本人との交流会など
 - ⑤ 第5次研修(2日間) …12月5日(土)～6日(日)
海外研修報告、県内での地域別実践活動の企画
 - ⑥ 第6次研修(フィールドワーク) …第5次研修と報告会の間の任意の日
県内での地域別実践活動
 - ⑦ 報告会(1日間) …3月中のいずれかの日曜日
研修成果報告会
※研修日程については、研修効果を高めるため変更になる場合があります。

※ 海外研修の内容について

①目的

産業・ビジネス・文化・社会貢献活動等の分野で、発展し続けるアジアの現状を体感するとともに、福岡(日本)がアジアに打って出る姿を学ぶことにより、国際的視野を身につけ異文化交流について理解を深める。

②研修内容

- ・産業インフラ、企業、文化施設、社会貢献活動等視察
- 例：大規模で先進的なインフラ・工業施設等の視察、現地企業の訪問、歴史・文化施設等の視察、日本や現地NPOの社会貢献活動の視察・体験
- ・現地青年との交流会・現地で活躍する日本人との交流会

4. 募集

- (1)募集人員 24名
(2)募集締切 平成27年6月26日(金)
(3)応募資格 ①～④のすべてに該当する者
- ① 県内居住者で、平成27年4月1日現在、満18歳～30歳の者
(昭和59年4月2日～平成9年4月1日生まれのもの)
 - ② 企業・大学・青少年団体・NPO団体・自治体等に所属・在籍する者で、国際的視野を身につけ企業・団体等の中核となって活躍する青年リーダーを目指す者
 - ③ 過去2年間(平成25年度以降)のうちに国・地方公共団体等の公的経費(一部助成を含む)によって海外派遣事業に参加した経験のある者、国又は地方公共団体の議会の議員の職にある者は除く。
 - ④ 健康状態等
・健康で協調性に富み、研修計画に従い海外研修等の活動が支障なくできるとともに、規律ある団体生活に耐えられる者
・第1次研修から報告会までの全てのプログラムに参加できる者

5. 応募方法

下記の書類をとりそろえ、6月26日(金)までに実行委員会事務局へ直接申し込むものとする。郵送可(当日消印有効)

- ① 参加申込書…様式1
- ② 返信用封筒(定形郵便のサイズで、住所、氏名を明記の上82円切手を貼付)
- ③ 推薦書…様式2
(参加者の所属する団体内の関係者による推薦とする。ただし、参加者の親族や友人による推薦は認めない。)
- ④ 勤務先所属長の承諾書(ただし被雇用者のみ) …様式3
- ⑤ 作文
この研修で何を学びたいか、研修後、成果をどのように活かしたいか等を具体的に記述すること。
・パソコン、ワープロを使用し、1,200字程度にまとめること
・縦A4判横書きとし、タイトル及び氏名を明記すること(タイトルは自由)
- ⑥ 保護者の同意書(ただし4月1日現在で20歳未満の者のみ) …様式4

6. 団員候補者の選考、決定

(1)団員候補者の選考

実行委員会において、第1次選考(書類選考)を行い、結果を7月上旬までに本人に通知する。
書類選考の合格者については、7月12日(日)に第2次選考(面接)を実施し、8月中旬までに団員を内定し本人に通知する。

(2)団員の決定

団員の決定は、第3次研修まですべて出席し、かつ団員としてふさわしいと認められる者について第3次研修終了時に行う。

7. 経費・損害等の負担

(1)次に掲げる経費については個人負担とする。

負担金	その他の個人負担経費
社会人 110,000円	県内研修に係る経費(交通費、食事代、宿泊費)、 パスポート取得に係る費用、旅行傷害保険料、 海外研修に係る経費(県内旅費、一部の食事代・ 交通費等)
学生 90,000円	

(2)負担金は、第3次研修前までに納入するものとし、原則として返金しない。なお、負担金納入後、団員が自己の都合により辞退した場合に生じる旅行代金のキャンセル料については、団員が全額を負担し、主催者は負担しないものとする。

(3)研修中の災害、病気、事故、個人の不注意等で主催者の責めに帰さない理由によって生ずる参加者の損害等については、主催者は責任を負わないものとする。

8. 団員資格の取消し

- (1)団員として不適当と認められる者(研修の無断欠席、悪意を持って研修活動を妨害する者など)については、団員の資格を取り消すものとする。また、海外研修中における資格の取り消しは団長が行い、速やかに帰国させるものとする。
- (2)海外研修中に団員の資格を取り消した場合における帰国に要する経費は、取り消された者の負担とする。
- (3)上記二項のいずれかに該当した場合、すでに実行委員会が負担した経費の一部または全部を取り消された者から返還させることができる。

9. 事後活動

当事業に参加した団員は、これまでの事業参加者で組織している「福岡県青年の会」に入会し、積極的に地域活動を行っていただくこととする。

問い合わせ先

福岡県青年の翼実行委員会事務局

〒812-8577 福岡市博多区東公園7番7号
福岡県新社会推進部青少年課内 電話 092-643-3386

